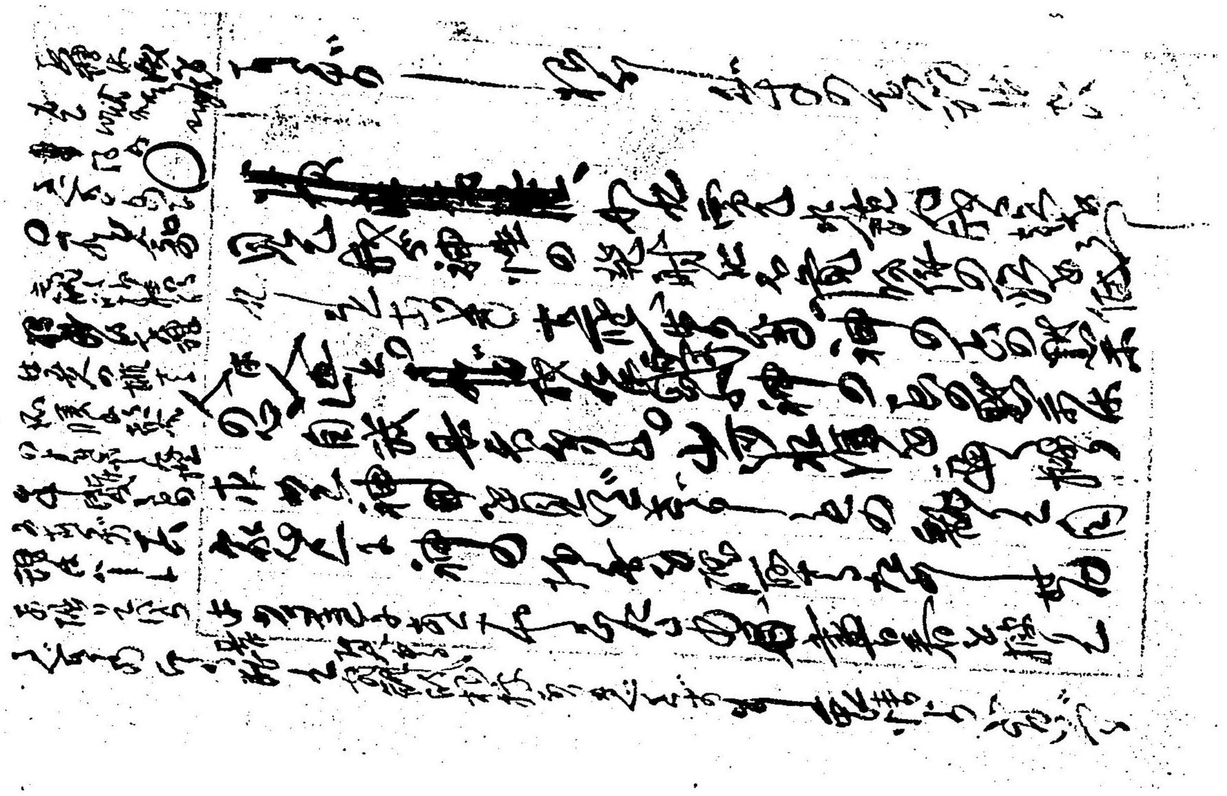
88-325

エ4ヒ27

拓本目錄

明治
42 9 17
内交



凡例

一、本書は故綱島梁川君の遺稿中、明治三十二年五月より仝三十六年六月に至る感想錄を集輯したるものにして、曩に公けにしたる『寸光錄』は、直ちに本書の後に接續すべきものなり。

二、『寸光錄』凡例にも記せる如く、梁川君の遺稿として存せる三十有餘冊の隨錄の多くは、折にふれての隨感隨想を手記せられたるものに過ぎず、殊に本書に收めたるは、其の最も初期に屬するものにして、之れを其の儘世に公けにするは、平素其の思想を發表せんとするに當たり、推敲

洗錬、偏へに其の意を誤り傳へざらんことに苦心せる故、人の本意に負くこと尠なからざるべし、讀者之れを諒して、既に公けにせられたる他の著書と引照し、梁川君の全面目を髣髴せられんことを望む。

三、本書の題號は『寸光錄』の例に從ひ、假りに卷頭の篇名を採りて『我觀錄』と名づけたり。

四、猶ほ本書の前に接すべき『道德的理想論』と、晩年の述作『病窓雜筆』等、及び明治三十九年以降の書簡は、なるべく速かに刊行すべし。

五、本書の稿本中、抹消せられたる箇所尠なからず、殊に「我觀錄」禪の研究當時のものに頗る多かりしが、考訂の際、故人の意に從ひて省きたるものと、刪除せずして掲出したるものとあり、文中〔　〕を附したるは卽ち其の箇所にして、之れが取捨は其の前後の關係、或は重複の點の斟酌査覈に因りたるなり。

六、稿本に於ては、章節の區劃、及び句讀等一定せず、是等はすべて『寸光錄』の例に倣ひ、其の篇頭若しくは欄外に記しありしものは、或は二字下げとして本文中に收め、或は其のまゝ篇頭にとどめたり。

七、文字の正俗、假名づかひ等は、故人の用法に倣ひて多少の注意を加へたる外、大方は原本の儘を存せんことをつとめたれど、猶ほ考訂校正の遺漏なきを保し難し。

八、卷頭の肖像は、上部は明治二十八年七月、東京專門學校（早稲田大學）卒業當時の撮影にして、下部は明治三十六年六

凡例

月二十三日の撮影に係る。又筆蹟は本書「雜記其四」中(三百二十八頁の一條、及び三百二十七頁の末項參照)の一項にして、其の各篇の初めに挿める寫眞は各稿本の表紙を撮れるものなり。

九、遺稿は故人の遺弟綱島(元建部)政治君苦心の收輯に係る。編輯は坪内博士及び哲學會員諸君の贊同と、宇佐美英太郎君及び其の他の法友諸君の協議とを經て、中桐確太郎專ら之れに當たりたれども、原稿の整理に就いては一色義朗君を煩はしたるもの多く、又校正及び出版に關しては望月世敎、中山三郎兩君の盡瘁甚だ多し。謹みてこれに感謝の意を表す。

明治四十二年六月十四日　編者識

我觀錄目次

我觀錄(明治廿二年五月以降)……一
雜記其一(明治廿三年二月以降)……五五
雜記其二(明治廿四年九月以降)……一二九
雜記其三(明治廿五年三月以降)……一七三
雜記其四(明治廿五年五月以降)……二二一
雜記其五(明治廿六年二月以降)……三六五

昭和二年 青木

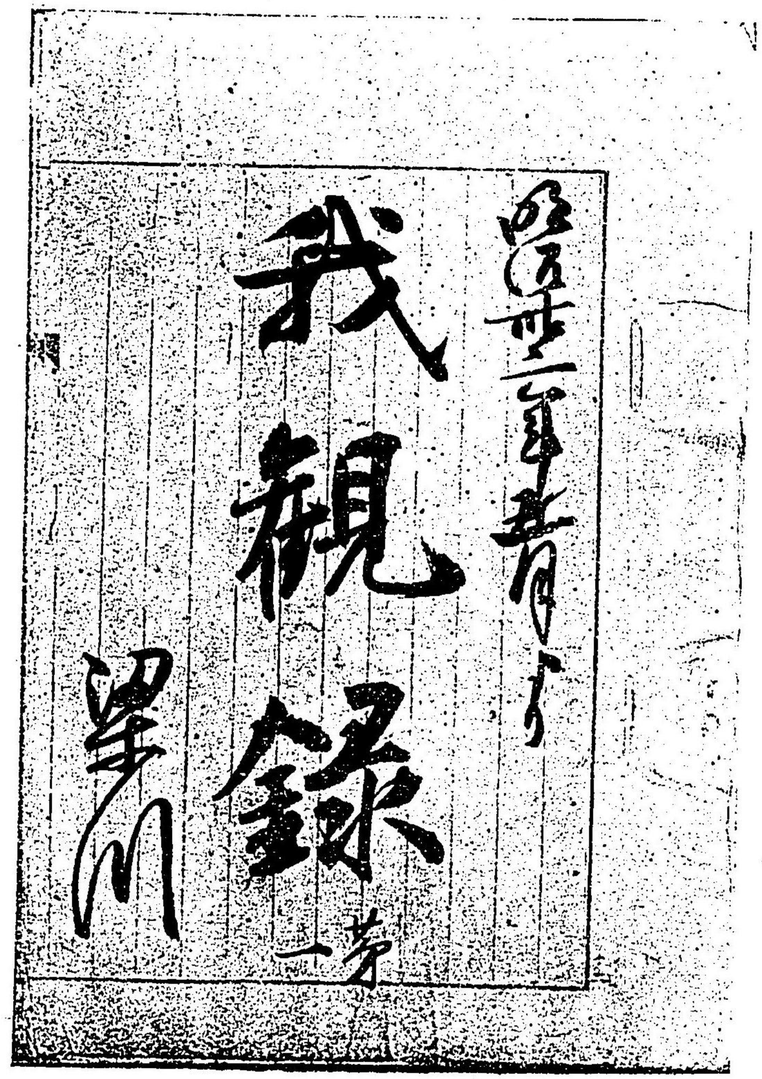
我觀錄

第一

澤川

我觀錄目次

畢



我觀錄目次畢

我觀錄

○禪は一個の人の悟をのみ重んじて、社會の人として社會的に達せらるべき究竟の悟あるを說かず。自他共に悟に進まんとする自他の一味なしとはいはず、されど禪の見地よりせば、社會的團體例へば國家の如きものを組織して文化を發達せしむるといふ事は、必しも要とすべき事にあらざるべし。何となれば、禪の所謂悟なるものは、社會的關係なくとも個々人自らの正念工夫の果として得らるべきもの、否禪より見れば、社會的關係は寧ろ一種の煩惱として

排すべく、人はかゝる塵情の累を脱して、山林泉石の間にこそ其天眞佛を透見し得べきならずや。或は又動靜の工夫を重んずるの見地より、紛々たる世路塵寰の間に立つの要を說くものあれども、是れとても唯だ正念工夫の一方法たるに止まりて、社會其者に左程の意味を附したるにあらず、或は個々人の悟は所謂方便目的にして、究竟目的はストア派の夢想せる悟者賢者のみの組織せる一團の「理性鄉」の如きものを打ち建てゝ、文化の頂點に達したる黃金時代をこゝに造らんとするにあるか、禪果して此る理想を有するか（予は之を疑ふ。假りに禪はかゝる理想を有すと見ん、而してまた此る理想の實現せらるゝ時ありとせん（果して實に實現せらるべきか否かは疑問なれども）、然らば此る理想鄉は其一鎖片たる今の社會今の文明を離れては無意義なり。是れ實在を基礎とせずして理想を作らんとするもの也。今の文明の完成圓現フルイシヨンとしての黃金時代ならぬ黃金時代とは如何なるものなるべきぞ、所謂文明と稱する社會的現象を擺脫し去りて、唯だ禪的悟をのみ現じたる人の一團を稱して理想國とせんか、哀れ其は何たる貧なる抽象的なる社會ぞや。頗る疑はしといふべし。要之禪の一特相は非社會的といふ事にあり（佛敎全躰が然るが如く）。

（明治三十二年五月七日相州早川漁村に於て）

○如來は歎美して曰く、希有なるかな一切衆生如來の智慧德相を具すと、げにや悟道の眼より見れば、草木國土皆一如の佛性を具して燦爛たる光明を放てる莊嚴海たるべく、

土芥一塵の微も、直ちに是れ佛性の示現ならぬはなかるべし。然らば無明の妄念其者は何ものぞ、釋していはく是れ一念の迷より現ずと。されど一念の迷其者は何ぞ、或はまた迷悟二境を超越せるもの之れを自性の本躰と說かんか、煩惱即菩提迷即悟と說かんか、されど是れ絕對の見地より下したる解にして、以て差別界に於ける二者の實在を沒するに足らず、絕對の見地よりいはゞ、白もなく黑もなく主觀もなく客觀もなく我もなく非我もなく男もなく女もなく蕩々たる無名無色の姿たるべし。されど假りにも此差別界を空華の假相となし、了らざる限りは(大乘佛敎の極意は之れを空假と說かずして實在と說く)此差別界に於ける諸現象の實在をも認識せざるを得ず。然らば悟と迷との關係如何、もし迷を以て悟と沒交渉の一實在となさば、是れ正しく二元觀たるを免れざるにあらずや。禪は果してよく此二元論の臼窠に陷るを免れ得べしや。(五月十日於同處)

福德關係論につきてはエマルソンの報償論を參照すべしも

○禪はまた、萬法一如といひ一切具佛性といひて、直ちに超絕的見地より差別界の萬法を瞰すが故に差別界の眞評價を誤りやすき弊を生ず。禪は上より絕對を携へ來つて差別の萬法を律する也、其平等相の一面を認むるに急なる也、否差別相を平等化し普遍化し去らんとする也。(ユニヴーサリゼーション、イクオーライゼーションといふ一事は禪と離れざる一特相也。)人や馬や草や石や牛溲や馬勃や糞土や塵芥や、何れか是れ一如自性の黃金佛ならざるべき。是くの如くに一切の差別相中一如の自性を認めて諸法實

相と說く所は、觀する所まさしく禪否佛敎哲學の最も光彩ある大直觀なるべしと雖も、同時に普遍化、平等化の弊は一切のディスチンクション(差別)をlevelled downし、押しならして、諸物に同等の價値を附せんとするにあり。「一如の側、平等の側にのみ立脚して觀するが故に差もすれば差別界に於ける價値の區別を蹂躙し去らんとす。」蓋し差別界に於ける善といひ惡といひ正といひ邪といひ醜といひ美といひ道德といひ不道德といふが如き種々價値の差別の起てる所以は、一言すれば諸物が理想を實現する程度の差より起こる也、即ち理想に向て進歩發展する階段に高下の別を有するが故也。理想に對する進化といふ觀念を撤せんか、差別界に於ける一切價値の別てゝに沒せん、何が故に一社會を文明とし他の社會を未開としてこゝに文野の別優劣の差を附せんとするぞ、他なし一は他よりも一層多く理想に近づきたるが故也。發達ありて此に萬差別の價値あり、ビーイング(實有)に沒入せる禪は上より直ちに瞰し、若しくは横に平等に觀じ去りて差別界に於ける高下(價値)の別を認めざる也。以爲へらく世間の道德何者ぞ、善といひ惡といふ畢竟是れ凡夫迷誤の徒の假構せるもの、青山白浪起、井底紅塵颺、柳は綠に花は紅に物みな自々本具の姿あり、何をか白とし何を黑とせん、世間法に執する笑ふに堪へたりと。これより來たる弊、不羈卓犖なり、我儘放埒なり、恣睢淫蕩なり。差別界に於ける群然たる價値の差別を沒する也、差別相の眞意義を滅却する也、是れ疑ひもなく禪に進化向上と

いふ宏大なる觀念の闕如せるが故ならずや。所詮發達といふ觀念を離れては事物の價値の由來及其眞意義は解せられまじ。聽かまほしきは禪のモーラリチー也、差別觀也、價値の起原高下也。

（五月十一日於同處）

佛敎の感化の然らしむる所か否かは別問題として、東洋文明は平等相を以て勝ち、西洋文明は差別相を以て勝つ。一は上より下に向ひ、一は下より上に進まんとす。美術的作物は殊に此事實を例示す、東洋の建築物、殊に伽藍などは壓下的にして單調平等、沈鬱鉅麗の姿を具へ、西洋の建築物は、希臘羅馬の當時よりおしなべて快活自由、美麗變化の態を具ふ、其一貫の調子は向上的也。

○禪辯じて曰はん、禪豈敢て差別界に於ける價値の別を蔑如せんや、其の別を認めて以て其の律に率ふ、是れを眞個參玄衲子の悟といふ。世間法を蔑如し差別の價値を認めざるが如きは、是れいまだ如來と同一の悟に入らざる野狐禪の徒の所爲のみと、然り高僧碩德は流石にこの大悟あらん、而も是れ要するに假りに世間法に調子を合はしたるものにはあらざるか、禪の本來は差別界の價値別を解釋する能はざる運命を有するにはあらざるか。何が故に一事は是にして一事は邪なるぞ、何が故に一社會は文明にして他社會は未開なるぞ。禪解して曰はん、一は佛性を具すると多くして他は佛性を具すると少ければ也と。佛性を具するの多少によりて價値の差別を見んとするは、蓋し禪が物

に差別を附する唯一の法なるべし。されど更に進んで何が故に一は佛性を具すると多くして他は少きぞと問はゞ如何に。發達といふ觀念を有せざる禪は、如何にして此二問を釋せんとはする。諸物に於ける佛性の多少は唯偶然事と說かんか、或はプラトーン風に諸物に於ける非有の素の多少によりてイデエ(佛性)顯現の度に多少の差を生ずと說かんか、禪或はこゝに因果の觀念即ち輪廻轉生の觀念を提し來つて、前世に善業勝因多きものは現生に智者賢者と生まれ、又前世に惡業重障多きものは現世に愚者鈍漢として生まると說かんか、然れども是の一解は未だ輪廻說の眞價を批評して之れを是認したるもの以外のものに對しては、未だ有力の答案ならざるを如何にすべき。(十一日於同處)

○禪の所謂悟とは如何なるものぞ、自ら悟らざるもの悟を言ふ權利なきは我れ之れを知る。然り悟の內容につきてはこゝに說かず、否說く能はざる也。唯だまばらく悟の形式を語らしめよ。所詮禪の悟は見性の二字以外を出でず、見性とは自性を見るの謂也。自我の本體、即ち我にして我ならぬ、主觀にして主觀ならぬ大我を觀るの謂也、差別我、經驗我を超越したる平等我實體我を觀るの謂也。一言すれば絕對を觀ずるの謂也。白隱禪師が其の心狀を形容する辭に曰く、

自己即ち是れ天地に先つて生ぜず、虛空に後れて生ぜざる底の長生久視の大神仙なるとを覺得せん

(白隱禪師遠羅天釜)

純一無雜打成一片の眞理現前して千人萬人の中にあるも、萬里の曠野に獨立したる心地あつて、彼の龐老が所謂雙耳如聾眼如盲なる境界は時々にこれあるべし。是れを眞正大疑現前底の時節と申す事に侍り。此時退かず勤め進み、給はゞ、氷盤を擲擂するが如く玉樓を推倒するに似て、四十年來未だ曾て見ず未だ曾て聞かざる底の大歡喜あらん　（仝上）

只一向に蒲團上の事を忘却せず、自己の正念を打失せざるを第一として、生も亦夢幻死も亦夢幻天堂地獄穢土淨刹悉く拋擲下して、一念未興已前萬機不倒の處に向て、是れ何の道理ぞと時々に點檢して正念工夫相續を肝心とせば、いつしか生死の境を打ち越え悟迷の際を超出して金剛不壞の正體を成就せんと、これ眞個不死不老の神仙ならずや　（仝上）

終には打成一片の工夫現前して、此の十四五日以來は想念も苦惱も雲霧などのはれ失せたる心持にて、大安樂なるのみに非ず、眞正生死不二佛魔同躰の眞理に契當して、唯有一乘金剛不壞の奧義に徹底したるぞかし　（仝上）

いつしか聞及びし正念工夫の大事に契當して、平生の心意識情都べて行はれず金剛圈に入るが如く瑠璃瓶裏に坐するに似て、一點の計較思想なく忽然として大死底の人と異なるなけん。纔かに蘇息し來れば覺えず、純一無雜打成一片の眞理現前して立處に法華眞の

面目に撞着して忽ち身心を打失し、本門壽量久遠實成の如來は目前に分明にして推せども去らず（仝 上）

〔大凡三敎の聖人も實處に到つては大段同じ、其進修の淺深精麤に依て得力の高下はあるべけれども、最初の一歩は趣ひとし。儒門には此處を至善といひ、未發の中といひ、道家には虛無自然といひ、神家者は高間が原と相傳す、天台には一念三千止觀の大事とし、眞言にては阿字不生の觀法といふ。（張子、中齋などの所謂大虛も心學者流の無我も耶蘇敎のゴッドも同一と見らるまじきか。）

（仝 上）

尙ほ客觀の側より絕對其者の面目を描きたる語に曰く、

是れを直心とも佛性とも菩提とも涅槃とも無位の眞人ともいふ也、此眞人は空劫以前空劫以後少しも病氣も鼻もきみたる事はなき人なるぞ、是れを法華には久遠實成の古佛と稱歎し給へり、南嶽の隨意願行に、昔在靈山名法華、今在西方名彌陀、濁世末代名觀音と釋し給へるも此の眞人の事たるぞかし、此人を供養し此人を尊信し、此人に親近して打失せずんば、何れの病か治せざらん、何れの道か成ぜざらん

（仝 上）

妙法の一心は展ぶるときは十方法界を含容し收むるときは無念無心の自性に歸す、此故に心外無法とも說き、三界唯心とも諸法實相とも說き給ひぬ、其極處に到つては法華經といひ無量壽佛といひ、禪門には本來の面目といひ、眞言には阿字不生の日輪といひ、律家には

根本無作の戒體といふ、皆是れ一心の異名なりと覺悟致さるべし　（仝上）

常住佛性とは此心性は佛に在りても增しもせず衆生に在りても減じもせず、天地と同根、萬物と一躰にして曠劫以前曠劫以後少しも變易なき處を指して、經とは說き給ひたる也　（仝上）

思ふに純一無雜打成一片の眞理現前すといひ、法華眞の面目に撞着すといひ、生死不二、佛魔同躰の眞理に契當すといひ、金剛不壞の正躰を成就すといふの諸語は、明かに絕對に觸れたる、若しくは同じたる或一種の意識を表せるものなるべし。形式的に觀て、禪の悟が或一種の超越の意識を有するは疑ふべからざる事實なるべし、即ちたしかに實在（絕對）に觸るゝ事あるは否むべからず（吾人は果して實在をばよし其一部分なりとも、如實に知識し得る力ありや否や、即ち意識として念として現じたる實在を以て直ちに之れを實在となし得る客觀的根據ありや否やの疑問は、當然此に起り來たるべきも、こは知識論上の問題なれば姑く別問題とし、假りにこゝには意識に現じたる實在を如實の相とせん）、是れ程の事は予輩事實として禪に許すべし、されどこに一事の制限を附せざるべからざる事あり、他なし、禪の實在に觸るゝ所は其一部にして其全體にあらずといふ事是れ也。何が故に其全體に觸るゝ能はざるぞ、曰く自我は全く超越し盡くす能はざるが故也。超越は自我の本性にして、超越し盡くす能はざるも亦自我の本性也、自我は超越

す、されど全く超越する能はず、超越するが故に實在の一部と面を合するを得、而も全く超越し了らざるが故に實在のホールと抱擁する能はず、「誰れか神を知りつくすものあらんや」、是れ實に悲しむべきの事實なりと雖も、無限性と有限性との矛盾より成れる人性は、つひに全く此矛盾を換釋する能はざるを如何にせん、否人性の意義と價値とはこゝに存す。此拔くべからざる大矛盾を釋かんとして、此に歷史生じ文明起る、人は無限欲の翼を鼓して永へに光明の世界に翔けらんとす、而も人はつひに全く其實在の當體と合し盡くすの期なきを如何にせん。

〔(合し盡くさざる何ぞ病まんや、人はおの〳〵其意識の分に應じて實在と合す、要する所は自家意識の全を盡くすにあり。嬰女童幼の觀たる神と大人學者の觀たる神と其異なるは言を須たずといへども、彼れと此れと意識の全を盡くして神を觀たるは一也。天上の月碎けて千萬の月となる、波面の月、樂頭の月、露上の月、おの〳〵多少の姿を異にすといへども、彼等はたおの〳〵其の全を盡くして月を宿せるに至りては換一也。我れの全實在、究竟の樂地蓋し此に在り。)〕

○超越に域(リミテーション)あるを人性の實相とせば、禪の悟のみひとり能く此法則以外に立つを得んや。即ち悟は要するに相待的にして絶對的を許さゞる也、主觀的には自我を全く超越しつくし、而して直ちに自性の本體即ち禪の所謂空劫以前空劫以後に亘りて(依然たる)不死不滅なる眞人の當體と撞着したるの感あるべしと雖も、而も其は要するに相待的たるを免れざる也、一部的たるを免れざる也。絶對的の全と合するの境は、主觀の意識にのみ見るべく、客

觀的にいへば悟の觸るゝ所は實相の一部を出でず、人は到底如何なる方面より見るも、自我を全然超出する能はざる運命を有すれば也。〔禪は其悟を形容して極力自我ならぬ自性(普遍我)圓現の狀を述すといへども、自我の影は尙ほ隱然として其背景をなせるを知らざる也、自我の鐵鎖は尙ほ識閾以下の境より一種覺知しがたきほどの影響を及ぼしつゝある也〕曰く平生の心意識情すべて行はれず、曰く一點の計較按排なき大死底の人、曰く金剛圈に入るが如く瑠璃瓶裡に坐するに似たり、曰く氷盤を拋擲するが如く玉樓を推倒するに似たり、曰く囫地一下の大歡喜と。禪が超絕的意識たる悟を狀する、至れりと言ふべし。然り禪の悟は一種神祕不可思議なる超絕的意識也、天地一指萬物一馬、十方を目前に消融し、三世を一念子に貫通する意識は、是れ豈直ちに萬法の一如を觀じたる刹那の意識にあらずや。

これまさしく悟の意識也、悟の本性は超越にあり、悟に到るの方案(メソッド)には種々ありと雖も、要するに悟と稱する一種の心狀は自我の超越にあり、差別の超越にあり、自我を超越して大我と抱き、差別を超越して平等と合したる瞬間の意識、即ち是れ〔平生の心意識情〕以上に一種の普遍相を築きたる意識也〔平生の生活以上に一種の新天地を觀じたる意識也〕、我れ自ら神となり、我れ自ら天地の實在となりて十方を遍照し三世を抱攝するの意識也、是れ我の超越的意識也、驚絕すべき神祕的意識也、トランスフィギュアせられたる意識也、大歡喜の情、甚深の滿足、溥然として此に生ず、而も悟やつひ

に相待の境を出でざる也。(之れを以て直ちに如實の自性本體(神)を攫めりと思惟せば誤る、禪如何に自我を排し差別相をエキスクルードすとも、其悟や依然たる自我、差別を伴へる(無意識ながらに)を免るゝ能はず。故如何にとならば自我は全く自我を超越し了せざれば也。(十四日於同處)

○禪の悟の相待の境を出でざる所以は、尙別の方面より立證するとを得べし。禪は皆悟の絶對相を說く。苟も悟といはるべきものは、何人の悟たるを問はず、皆等しく正念工夫の大事を成じ、見性の彼岸に達し、本來の面目に撞着して囫地一下の大歡喜を得と說く。而も此は究竟する所、悟の形式(姿)の方面にして悟の內容にはあらず、悟の內容は言說を絶したる摩訶不可思議の玄境神祕境なるべく、之れを語り之れを筆せんとすれば忽ち矛盾すべし。悟の內容は唯〻意識せらるべくして摹狀せらるべきものにあらず。

然るに彼れ禪の悟を語るや、自ら描ける形式の絶對相を以て直ちに內容の絶對相を描けるものと思惟す。彼れ禪家は「三敎の聖人も實處に至つては大段和同じ」といふ也(又曰く「其極處に至つては法華經といひ、無量壽佛といひ、禪門には本來の面目といひ、眞言には阿字不生の日輪といひ、律家には根本無作の戒體といふ、皆是れ一心の異名なりと覺悟いたさるべし」と)、即ち禪は凡ての人の悟、其極處に至つては皆同一なりとやうに觀る也。凡夫も悟れば佛なり、其極處たる悟其者に兩般あらんやといふが、即ち一般佛家の悟を解く本意なるべし。されど萬人の悟果して皆同じきか、(萬

人の悟皆一なりといふを得べきか、客觀の自性の一なるは論なし、又人おの〳〵が自家意識の全を盡くして其悟を得たる揆(形式)の一なるは論なし、されど悟其者の內容をも萬人一といふを得べきか。凡夫の悟と釋迦の悟と其のおの〳〵自家機根にかなへる悟を得たる(形式)は一なりといひ得べし、されど悟の內容其者をも彼れと此れと同一なりといふを得べきか。(我れは之れを事實を錯れるの解と斷ずるに躊躇せず。悟の內容を點檢せんか(不幸にして之れを點檢する道なきを憾とす、言說に上ぼす能はざる境なるが故に)。然らず釋迦の悟は凡夫の悟に比して如何ばかり其內容の富贍、深奧、博大なるぞや。禪の悟と儒の悟と、新プラトーン派の悟と基督の悟と、其悟の形式や一なるべく、同じく是れ實在の一部に觸れたる意識なるべしといへども、其悟の內容や蓋し彼是殊狀異態(其深さに於いて又廣さに於いて)ならざるを得じ。悟豈絕對ならんや、純一ならんや、悟自らが發達(あり變化あり、個人につきて見るも、其心內容の貧富深淺の程度に隨ひ、其修業工夫の精粗多少によりて悟其者の內容を異にするにはあらざるか、まして儒佛道耶の悟をや。此く解するは最も悟の解釋として事實を得たるものにあらざるか。されば白隱禪師の如き、一方には、悟は一なりと斷じながら、此事實に眼を掩ふ能はずして、他方には其人〳〵によりて多少の差異ある由を述べたるは又奇ならずや、曰く

大凡三敎の聖人も實處に至つては大段同じ、其進修の

淺深精麤によりて得力の高下はあるべけれども、最初の一歩は趣等し云々

と。最初の一歩は趣等しといへるは、是れ悟の形式の萬人一なるを云へるものにあらずや、而して得力の高下ありといへるもの、是れ明かに悟の内容の彼此同一ならざるを證言せるものにあらずや。而も此くの如き差異を來す理由を其進修の淺深精麤に歸したるは、更に明に悟の絶對的ならずして差別相の制限内に立つ所以を默許せるものにあらずや、同一の悟といふとも(形式上)其正念工夫の精粗深淺に因りて得力(内容)の高下を生ずと說けるものにあらずや)する也、高下の別を有する也。若し悟にして眞に絶對純一のものならんか、悟に到る一定の條件をだに具ふれば(其如

*白隱禪師は他方には又實に此くの如くに既くも也日く「大事を成辨するには至つては行持はたと違ひ品異なれども、その所證に至つては豈兩般あらんや」と

何なる條件たるに關せず)萬人皆同一悟に入るべき理なり、釋迦も凡夫も一旦本具の自性を大觀したる悟の曉の樣は同一不二なるべき理也、復た何ぞ悟に入る徑行の如何に關せんや、修業工夫の方法如何に關せんや、また何ぞ其進修の淺深精麤によつて得力の高下を生ずべき理あらんや。(悟に入るの條件をだに具ふれば)禪もし悟を一なりとせば、此論理的斷案を如何にして避け得るぞ、禪即ち路を轉じて暗に悟の一ならざるを許容せんとす、此に援ける白隱禪師の語の如き、則ち明かに此遁路を示せるものにあらずや。想ふに事實に忠なるものは此く說かざるを得ざるべし、悟豈一ならんや、釋迦が四十年間の大苦業によりて成道したる菩提樹下の悟と、凡夫が一朝の悟と、誰れか之れを一なりと

言ふものぞ。因りて觀れば禪が如何に心念を排し、小我を排し、一切の差別相を擺脫し去りて、一氣直ちに絶對の中心に擣き入らんとするも、また實に其所謂悟と稱する超絶意識に於て然るを得と信ずるも、嗚呼彼れは尙依然として差別相を排除し了らざる也、差別相を排除し得ざればこそ修業工夫の精粗、心內容の高下(智愚賢不肖)によりて悟の得力其者に差別を生ずるなれ。人は如何に跪くも全く自己以上に拔く能はず、學者の悟は學者の悟を生じ、無學者の悟は無學者の悟を生ず、君子哲人の博大精微深奧なる宇宙觀人生觀其他一切の心內容(差別相)は、如何に之れを排除すとも、如何なる方法徑行によりてか其は竟に其悟道に影響せざるを得じ影響すればこそ凡夫無學者の悟と比して哲人君子の悟は其內容の夐かに高且博なるを見る也。嗚呼禪の悟豈ひとり此埒外に立つを得んや、禪の悟豈ひとり其差別我の係累(予は之れを惡意に解せず影響を脫し得んや(此事實は自我の全く超越すべからざる所以の理を證するもの、否自我は全く超越すべからざるが故に、此事實ありと觀るを得)。

(五月十六日於同處)

○頓悟といひ、天啓といひ、神來といひ、救拯といひ、解脫といひ、イルミネーションといひ、見性といひ、接神といひ、開佛知見といひ、悟の名目や多しと雖も、而も其形式的說明は要するに自我の超越といふ一事以外に出でざるべし。げにや悟の意識は驚くべき超絶の意識なるべし、神祕の意識なるべし、個中の消息蓋し言說を以て思議すべからざる或物

の存するなるべし。

"*To know*; to get into the truth of anything, is ever a mystic act of —— which the best Logic can but babbles on the surface."

Carlyle.

○悟は一種神祕の作用也(論理の得て測知しつくす能はざる或深奥の意義を有するは疑ふべからず、超越其者は幾んど思議すべからざる神祕也。而もカーライルの斷言せる如く、論理は此に一點の嘴を挿むの權利なきか、然らず(悟は神祕也、而も全く鐵鎖を脱して恣まゝに跳梁するほどに神祕ならざる也)、因果の法則は尙ほ一面こゝにも行はるゝの餘地を有する也。釋迦の悟は所詮釋迦的なるを免るゝ能はざるべく、基督の悟はた基督的ならざるを得ざるべし、

マホメットの悟然り、ボーロの悟然り、プロチーヌスの悟然り。其人の個性、品性に隨つて悟其者の內容變せざるを得んや、之れ悟の差別相也。誰か基督の悟と釋迦の悟とを同一と言ふものぞ、誰れかボーロがダマスコの途上にて忽然天來の聲を聽きたる悟と、マホメットがアラビアのハラ山の洞窟にて一大事を大悟したる悟とを同視するものぞ、誰れかまたプロチーヌスの所謂イルミチーションと禪の悟とを同視するものぞ、嗚呼悟やつひに絕對的ならざる也。

〔○我れは今こゝに禪の悟と他の悟(たとへば基督、マホメットの悟等)と如何なる點に於て相異なるかを言はざるべし、否言ふ能はず。されど形式的にいへば禪の悟は極めて抽象的なる、主觀的なる、冷靜なる、一言すれば智的悟たるは

明也。少なくとも基督教などに於ける小なる人格と大なる人格(神)と相觸れ相抱きたる一種溫かなる具象的なる悟にあらざる也。禪の悟は觀理より來る悟也、差別を空了するより來る悟也、其が一種寂靜の相を具ふる蓋し理あるかな。我れをしてこゝに至りてまばらく禪の「メソッド」を見せしめよ。

○禪のメソッドは極めて冷酷也、峻嚴也。悟に到るまでは一歩をも退かず、一氣に正念工夫し、不斷に座禪す、一念一想直ちに之れを一束の話頭として其源に溯り、其一念一想の主に面せんとす。其のモットーはこれ何物ぞ、是れ誰れぞやといふにあり、我れと稱するものは何ぞ、而か疑ふものは誰れぞ、思ふものは誰れぞ、聲を聽くものは誰れぞ。かくして一歩一歩參究の度を進めて、直ちに萬有の大源に擣き入らんとす。蹴落されては起き、轉倒しては再び進み、一念の機微をも心頭に存留するの餘地なからしめ、「一切の塵境と戰ひ、妄念情量と戰ひ、昏沈睡魔と戰ひ、動靜違順と戰ひ、是非愛憎と戰ひ、死と戰ひ、病と戰ひ、かくして我(エゴー)を排除し根滅せんとを力む(此くの如く自我の本源へ〳〵と問ひ詰め推しつめもて溯りゆくと、即ち禪の所謂「獅子人を咬むの法」また「韓獹塊を追ふ法」也)、かくして全く我を空じ了りて(我豈全く空じ得らるべきものならんや)始めて一念不生の本來の面目現前すと說く、所謂悟に入りて囚地一下の大歡喜は得らるゝ也。

○是れ禪の悟の方案也。其の特質は消極的否定的也、エ

キネクルヽシヨウ、メソッドも也、是れ悟の一法なるべし。されど悟の方法は禪に盡きたりとはいふべからず、我等にもし悟の方案ありとせば其の取る所少しく異なる。蓋し悟は多くの場合に於いて一種のサグゼッション也、或事物(差別界の)に暗示せられ、其れを機とし縁として絶對と感應する也。人は絶對を直ちに觀る能はず、或媒を介して之を觀る。神は直ちに人の胸間に「照り入る」("glare in")能はず或差別界の事物を機とし其の大明を投入す。是れ人の本性より來る自然の約束也。全く差別を超越しつくす能はざる人の本性は、或る差別を媒とし縁とせずば神を觀る能はざる運命を有する也。プラトーが人は個々物を觀之れに暗示せられて始めてイデエの光明を想起することを得といへるもの、この消息を語るもの也。神來といひ天啓といひ豁然大悟といふもの、皆或事(差別)に觸れて忽然自我を超越する刹那の意識を指すの悟にはあらざるか。此意識の極めて強烈深奥にして、幾んど差別を碎破しつくして直ちに絶對者と相合したるの超意識を有する也、彼の釋迦が雪山にて忽然大悟の境に入るや目前の落雷をも意識せざりきといふが如き、如何に其超意識の強烈なるかを見るべし、我れは之れを以て悟の普通相となす。然るに奇なるかな禪のメソッドや、禪は或事物の縁を頼まざるのみならず、寧ろ是れを排し是れを空じて、獅子の人を咬むが如くに一切の情念を敵として、直ちに面と面と絶對に合せんとす。禪果して差別を空了し得るか、否、空了し得ざるか之れを空了せざるを

して進む也、而して空了の結果として悟を得たりと思惟する也。要之禪のメソッドは消極的也、排除的也、否定的也、否定し排除し空了し(全く空了し得ざるは上述の如し)、而して後豁然として見性の大事に觸着す。我れは之れを悟の一方案として排せざるべし、然れども悟の方案豈此一法に盡きんや」に至りて悟は極まる。

「〇悟其者の性質は其方案に決定せらるゝと多きを見る、禪の悟が一種抽象的寂靜的なるは、蓋し其方案の冷酷峻嚴より來らずんばあらず。「十二時中只面皮を冷却し眼睛を瞎却して、毫釐も人情を交へざれ」と、感情を煩惱として斥け差別を羈絆として排し、而して其大源に溯らんとす。かくして觀じ得たる自性其者の極めて冷靜寂滅の相ある、自然の果也。もとより大歡喜といひ、山河大地を照破する光明の發すといふが如き語に見れば、禪の悟の全く消極的なるものにあらずして積極的意義を有するは明かなり、然も要するに其智的又意的特相を以て勝れるは疑ふべからず。基督が我れによりて生れ更れるものは、無限の生命の源となりて、滾々として流れ出づべしといへるが如き意味の悟とは頗る其趣を異にすといはざるべからず。我れは敢て禪の方案を排するものにあらず、されど悟の方案豈ひとり禪の方案に限らんや」

「〇禪の方案は excluding method (排除的方案)ともいひ得らるべし、只管に差別相を排しエゴーを根滅するの方案なれば也。之れに反して廣く深く天地萬有を觀察し、其心的內

容を饒かにし、因りて以て天上の靈火を喚び來たる方案を
ば、予はこゝに*suggesting method（想起的方案）と呼ばんとす、
禪の方案のひとへに差別を排し自我を斥くるに反して、此
れは寧ろ其の差別（善意にての）を廣く攝取しエゴーを擴大
して（小我僞我を擴大するの意にあらず、主觀といふ意味に
てのエゴー也）、而して廣く深く天地の實在に觸れ、かくして
大悟の準備を作さんとす、此準備なくして漫に悟を求めん
とするは誤れり、よし悟を得るとありとせんも、此の準備な
きの悟は望ましからざるの悟也。

〔○悟は準備を要す。我等は內容の貧少なる悟よりも、內
容の富贍博大なる悟を得んことを欲す、而して是くの如き悟
は、大なる準備と須つて始めて得らるべし。一旦豁然とし
て悟るといふ、而も此境に至るまでの準備豈容易ならんや、
我等は悟を說くの前にまづ悟の準備を說かざるべからず。
天地人生に對する知見を深奧博大ならしむる、是れ準備に
あらずや、嗚呼悟豈容易ならんや。〕

○我等は悟の方案としては、排除的方案よりも寧ろ想起
的方案を取らんと欲す。前者よりも後者のかた方案とし
ては遙かに自然也、醇粹也、近世的也、エフェクチーヴ也。

（以上主として禪の短處をのみ見たれど、長所豈無からん
や、我等の禪によりて學ぶ所少からざる也。今は唯
之れを說く能はざるのみ。）

（五月十六日於同處）

○

エマルソンの銳利深奧なる直觀が、予を敎へたる事少か

*appropriating method といふ方程式ならんか

らるる中にも最も予をして傾倒歎美の情に堪へざらしめられるは左の語なり。

" In the nature of the soul is the compensation for the inequalities of condition. The radical tragedy of nature seems to be the distinction of More and Less. How can Less not feel the pain; how not feel indignation or malevolence towarde More? Look at those who love less faculty, and one feels sad, and knows not well what to make of it. He almost shuns their eye; he fears they will upbraid God. What should they do? It seems a great injustice. But see the facts nearly, and these mountainous inequalities vanish. Love reduces them, as the sun melts the iceberg in the sea. The heart and soul of all men being one, this bitterness of *His* and *Mine* ceaces. He is mine. I am my brother, and my brother is me. If I feel overshadowed and outdone by great neighbours, I can yet love; I can still receive; and he that loves makes his own the grandeur he loves. Thereby I make the discovery that my brother is my guardian acting for me with the friendliest designs, and the estate I so admired and envied is my own. It is the nature of the soul to appropriate all things. Jesus and Shakespere are fragments of the soul, and by love I conquer and incorporates them in my own conscious domain. His virtue, —— is not that mine? His wit,——if it cannot be made mine, it is not wit.

何等哲人の大直觀ぞ。報償論一篇の中此一解の如き高調の文字あるを見ず。彼れが自然の二元を說きて事物相待の理を觀ずるや流石に人として天道の流行に想到せし

むるものなきにあらずといへども、此に援ける意味にての報償論に比すれば、概ね平凡言ふに足らざらんとす、唯〻此一節ありて一篇の文字新光彩を着し來る。中にも「我もし傑出せる他の影に蔽はれて色を失するの感あらんとも、我れは尙ほ彼れを愛するを得る也、彼れを容るゝを得る也、かくして彼を愛するものは其愛の偉大を自己の有となす」の句の如き、何等神的高調の文字ぞや、偉大なるかな此意味にての報償や。

（五月十九日）

○

自己の他に知られんとを希ふは、拔くべからざる人の至情也。士は己れを知るものゝ爲めに死す、眞に己れを知り己れのコーズの爲めに同情するものあらば、然り此くの如き人一人あらば、天下萬人我れの敵たりといへども此に無限の滿足あり、甚深の慰籍あり。されど何人かよく眞によく我れの知己たるものぞ、父母か、朋友か、師か、嗚呼父母や朋友や師や、我れを知るの最も深きものゝ一人也、而も要するに我れの一面を知り得るに過ぎず、我れの全人を知悉して、隈なく同情の光を灑下するものは、至高の實在者一人あるのみ、我れの胸臆に潛める無言無語無聲無臭而も靈智靈覺十方を遍照する實在者あるのみ、我等は全能者を知己として始めて能く安立するを得る也。

（五月廿二日）

○

悟は主觀的には絕對なれども、客觀的には決して絕對を以て許すべからず。悟の境界を以て客觀なる宇宙の本體

と一致し佛陀と契合するものとなすは、未だ眞理の全分を言表したるものにあらず。客觀(實相)と觸着し契合すといふも、要するに差別的契合、主觀的契合の意以外を出づる能はず、其所謂絶對は要するに我れのといふ形容辭を脱する能はざるを如何せん。差別の裡に圓現したる平等相、主觀を以て觀たる客觀、小天地相(差別我)に映じたる大天地相(平等我)といふ以外を出てゝ、如實に絶對其者と合し如實に實相其者となるの信仰は、決して事實を穿てるものにあらざる也、人は全く自我を超越しつくす能はざるが其本性なれば也。若し何人にても一定の悟の條件をだに具ふれば直ちに實在を如實に知悉することを得ば、我れみづから遽然として神となることを得ば、何すれぞ日夜孳々として自修するの要あらんや、文明も進歩もはた何の要ぞ。我等は悟を欲す、而も博大深奥の内容を有する悟を得んことを欲す、凡夫一朝の悟もとより侮るべきにあらずといへども、我等は精進自修の果として得たる大悟を欲す、嗚呼悟豈容易ならんや。最も發達せる悟を得んとは我等の理想也。此く言へば悟といふものの概念と矛盾するに似たれど、我等は飽くまで悟の内容の絶對ならざるを事實とするもの也。悟豈無等々の絶對其者ならんや、我等は悟の神祕を否むものにあらず、誰れか悟を神祕不可思議の心作用ならずと言ふものぞ、されど悟の神祕は全く人智を超越せる神祕にはあらざる也、我等は到底絶對其者の中心に全く飛び入る能はざる運命を有するものなれば也。

（五月廿五日）

○

推理上の理性は感情と同位のものにあらず。感情を動かすものは感情にして理性にあらず。二と二と合して四となるといふ抽象的知識は、如何に之れをコンテムプレートするも吾人の意志を動かさゞる也。唯だ件の眞理が吾人を動かすは、其が感情に結びつく場合に限る。即ちかゝる眞理を知識するとが、吾人の目的(其の目的の何たるかにかゝはらず)に資して間接に一種の價値の感を吾人の感情に與ふる場合にのみ、吾人は始めてこの眞理に動かさるゝ也。故に眞理は眞理其者として直接に吾人を動かすの力を有せず、其は唯だ感情に結びつき感情を媒としてのみ、始めてよく吾人を動かし得る也。

○

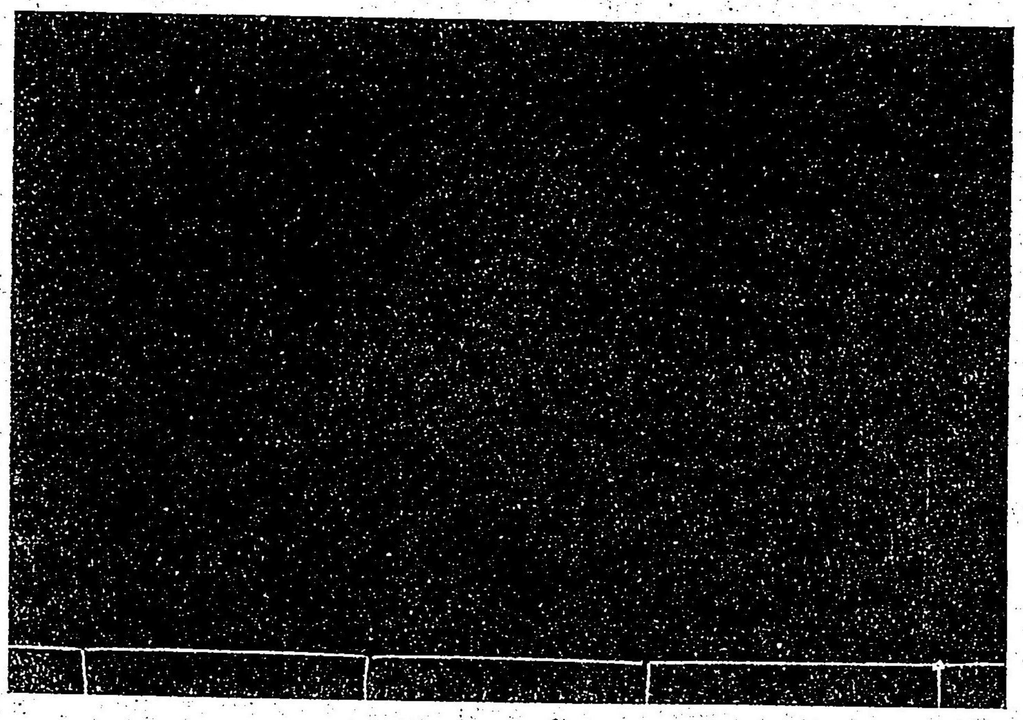
天才とは何ぞや、通常人の普通平々と見る事を大きく觀るの力也、強く感ずるの力也。事物の底に潛みて其深意義を攫み來り、之れをマグニファイする也、ディファイする也、否、彼れ自ら擅まゝに之れをマグニファイし、ディファイするにあらずして、其直觀力、洞見力は眞實に如實に然りと觀る也。其の言辭の誇張となり華麗となる、他より見れば一種の空文浮辭と見ゆべし、一種の詐謀者とも見ゆべし、されども彼れに於いて何をか病まんや、彼れは事實を語りたるに過ぎざれば也、事實を語るの道はこれ以外にあらざるを知れば也。凡人の虛と見るとこそ、天才にあつては眞也、此境に於いては詩歌と事實と美と眞と相合す。(五月十二日於相州)

○

論理あるも直觀なければ論や抽象的空論となるべく、直觀あるも論理なければ一貫の秩序理路を缺く。直觀は論理に生命と事實とを供し、論理は直觀にコンシステンシーを供す、二者相須つて事の實相を描くを得べし。カーライルの論理學を全く排斥せしは一種の烱眼たるべけれど、一面の觀たるを免れず。要之、論理の筆を行るものは一面常に歩々事實を顧み、其の富贍なる深奥なる無盡藏の具象的實相を味はざるべからず。論理家の弊として、動もすれば具象的事實の表面の一膜を剝ぎ取りて、之れを論理的に發展せしむるが故に、明は明なれども何等の厚さ深さをも具へざる抽象的議論たるべければ也。

（仝　日）

我觀錄　畢



雜記　其一

（想ふがまゝの記）

○研究問題
一自然に對する予の觀念
一グリーンの自己實現說の批評
一ought (moral)の意識の說明
一理性倫理說と感情倫理說
一福德問題
一興味論

○

神に會ふの最良の門戸は興味なり。すべての境、すべての事に處して、其の境、其の事を味ふべし。この味ふといふ事は即ち神を知るといふ事也、これを外にしては神を知るの道なしと信ず。唯だ睹る、聞く、知る（概念的に）のみにては早合點、早呑込たるに過ぎず、靈性進步の最大の障碍は早合點といふと早呑込といふと也。早合點は林檎の皮一重に觸れて眞に之れを味ひたると思ふ也。深く味ふものは繪畫を看、小說を讀み、山水を觀、人物に接して其の中心の一如

一宗教と美術

に到達せすんば已まず、我等の此世に於ける一切の脩業は要するに一如(神)を廣く深く強く味ふにあるのみ。一たび正直に誠實にこの味を嘗めたるものは、彼れの靈は再び塵に下らざるべし。而して其の味の誠實に感ぜられたるだけ其れだけ、其の人の靈は神化せる也、不滅となれる也。安立はたこゝにあらざるか。かくして吾人は吾人の中に實在を增じゆく也。而して一たび實在を切實に攫めるものは、惑はず恐れず、顚迷困躓せず、常惺々活潑々、萬境に應じて玲瓏透徹、融會無礙、而して神に進むの念ます〳〵旺となるべしと信ず。

（卅三年二月十四日）

一直觀の語義（心理上）

一我は如何に實在の論證し得らるべき

一自愛主義と他愛主義

一倫理上の最高目的即最高主義と直覺主義

一幸福說と宗教の根據

一ego を倫理說の根據とする

○

プラトーンの無數のイデヤは設くるの必要なし、論理上の概念として抽象的に之れを設くるはよし。されど一個一個の理想的實在を設けて、個物は之を分有して始めて有りと見るは無要也。唯一大實在たる神だにありと見ばそれにて十分也と思ふ。

（二月廿五日）

一何の利害如何

○

我れは獨逸抽象理想派の理想を說かず、唯だ物のタイプを說く。理想的なる一つのタイプありて、個物は之れを現ずるが故に美なりと說かずして、即ち純理哲學的に見ずして、唯常識上より畫家作者が件のタイプを理想化すると說く。實在には決して吾人の理想を滿足せしむるやうのタイプあるなし、この故に實在のタイプは要するに不完全なり、吾人は之れを理想化して完全圓滿なるタイプとなして

之れを書かんと欲するの要求あり。其のタイプの實非實は美學上より說くの要なし。

（仝　日）

○

種族的理想なるものは(即ち完全圓滿なる)實在せず、實在するものは唯タイプのみ。邦畫はこのタイプを理想化す。

（二月廿六日）

○

宗教と美術との相通の一側は、前者は大天地を其の渴仰の對境となし、後者は小天地を其の恍惚の對境となす。即ち對境の具象一元的なるは二者相同じ、唯一は實在の全(トタリチー)にして他は其の一部也、而して後者は前者の抽象にあらずして copy 也。規模は小なれども神の姿は美術(自然美をも含む)の中に縮寫せらる。この故に神を觀るの唯一のメソッドは、哲學的思索にあらずして直觀にあり、即ち分の中に全を發見するにあり。而も論理的徑行によりてにはあらずして頓悟する也、思ひ出す也、一葉一木を緣として、所依として、大天地の姿に觸れる也、小天地によりて大天地を直觀する也。この媒をからずしては神を知るの法はなしと信ず。

（三月一日）

○

觀美の對境と宗教の對境と、其の姿に大小の別こそあれ、渾たる one whole をなせる具象一元的の趣は同じ、唯だ之れに對する主觀の態度によりて宗教的となり美的となる。されど觀美の心持が轉じて不識の間に宗教的歎美となり、

宗教的歎美の念がいつの間にか觀美の心持とも恍惚の夢意識ともなり易き傾きあるは事實にして、其の理由は對境其者が畢竟同根より生じたる姉妹父子の分身なれば也。中桐君の葉上の露滴を見て何ともいへぬなつかしき悲しき慕はしきやうの心地がするといはれし、想ひ合すべし。

（仝　日）

○

希臘語のカロカガティア(善美)は福德問題の一參考たるべし。德は其れ自身にて whole をなすべきもの、其中におのづから自家滿足の天地あり。名教の中、樂地ありて一個の全をなすべきもの、外物の幸福を持ち來たるは誤れり(プラトーン、アリストテレース氏も福德の煩惱あり)。

○

禪的修業は要するに運用也、方法也、方式也。其內容理想は他に須たざるべからず。

（三月三日）

○

倫理の最高主義たとへば幸福主義もしくは自我實現主義もしくは國家至上主義等は、一々個々實際の場合に應用し得べからざるものなりや。もし反省しだにせば、一々其の最高原理に refer して、事の是非を判斷して、實行し得らるべきにはあらざるか。もしかゝる事は出來得べからずとして、一の直覺主義を立すとせば、則ち個の場合には其人其人の直覺によりて判斷する外なしとせば、是れと前の倫理主義とは如何にして調和し得べきぞ。否、もし直覺により

て萬事を定め得らるべきものとせば、別に至上の倫理主義を立するの要なきにはあらざるか。倫理の主義はどうしても一如統一的ならざるべからず、一以て貫かざるべからず、如何なる日常の小事細做に當て嵌めても直ちに明瞭なるが如きものならざるべからず。所謂生々主義といひ、パウルゼンの Energism といふが如きものは、果してよくかゝる目的を達し得べきものなりや。

○

感情もまた常に理智の作用に須つところあるは否むべからず。たとへば愛に慈善心に富める人ありて、或一人の貧困者を救ひたりとせよ、而して他日また一人の貧困者に出遇ひたりとせよ、而して此の場合には彼れを救助するの感情は起らざりきとせんか、此時理性は直ちに感情に命じていふべし、前の時に貧困者を助けたるに、何故に此の時また助けざるかと、而してこの理性の命に從ふとせば是れ取りも直さず彼れは理性をもて感情を補へるものにあらずや。而してこの場合の所謂理性は二の意義を含む、一は吾人の慈善的行爲は前後一貫なるべしといふ論理的理性、二はよろしく貧者を救ふべしといふ倫理的委しくは命令的、宣告的理性是れ也。前後二個の場合を比較し推論して其の同不同の關係等を見るは、是れ理性の論理的作用也。而してかくして既に同一と定まりたる上、之れを決行すべしとの意識は、これ理性の命令的、立法的作用也。（四月三日）

○

ポープの如く、名の爲めに文學を職とし、名聞を唯一の目的とするは果して文學者としての倫理的天職をつくし得たるものと云ひ得らるべきや。文學家美術家が、其の文學美術を唯だ名利を徼むるのツールとなし、之れを機械となし方便となして、他の或物の爲めにつくすが如きとあらば、是れ果して少くとも文學者美術家としての天職をつくし得たるものと言ひ得らるべしや。文學美術に對するobjective interestなきものは眞の文學者美術家にあらず。世には全くの方便的なるもの一もなし、一面方便として存すると共に、他面には其れ自身獨立の意義と價値と目的とを有す。個人は或意味に於て社會の方便たるべし、而も其はまた同時に其れ自身が目的たる也、すべての有機體關係を存せるもの、一として此の意味に於いて目的と方便との二面を具せざるなし。故に文學に應用していへば文學は一面人生の目的たるべし、Art for life は眞理なるべし。而も文學は全く人生の爲めに方便としてのみ其の存在の意義を有する純方便、純機械的のものにあらず、飽くまで文學自身の獨立の目的を有す、是れ勸善懲惡の爲めにのみ物せる文學の排せらるべき所以也。もし教化の道具としてのみ作られたる詩歌あらば、是れ純詩歌の本領を脱したるもの、これを作者の側よりいふも、かゝるは眞の文學者にあらずして、むしろ矯風家、教育家ともいふべきが至當也、文學其者に對する客觀的興味なければ也。馬琴流の勸善懲惡的作家は、是れ文學の方便的意義をのみ見たるもの、また三馬、一九

等の戯作者のともがらは、文學其者を玩弄視して他の高尚なる意味に於いての方便の一面を視ざりき。眞の文學者はこの二端に馳するの弊なくして文學を目的とし、また方便とす、即ち文學のみを知りて、これと他の社會政治等の有機的全躰の一部面としての文學を眼中に有す。文學といふものが如何なる位地を社會有機躰の中に有するかを知りて而して筆を執る、この眼識あるものにしてはじめて文學の眞意義、眞天職を解し得べし。この眼識なきものは文學を個人の道樂となして輕浮となり、または文學を他の教育政治の機械として方便とす。文學の社會的意義を解したるものにして、はじめてよく文學者としての天職を意識し得べく、文學者として倫理の目的を實現し得べしと信ず。

社會に與ふる結果を考へずして筆を執るはセツシヤルフイツシユ也道德の意義無し

スチーヴンの倫理學中の二二頁のこの二あたりの說の參照

ミルトンの心を動かせしものの一にしては美術に對する義務の念あり

文學美術の社會、堅牢といふ目的を有すと說く近世美學者の見解大に味ふべしと信ず。

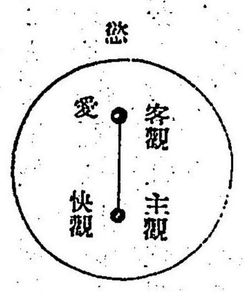
（全日）

○

イントレストと幸福とは別也。或事に interest を有して、このイントレストに驅られて事を成すは、必ずしも幸福に驅られて成すにあらず。吾人は苦痛にも尙ほイントレストを有する也、時としては幸福をすてゝ苦痛に就くとあるは何故ぞ。スチーヴンは、飽くまでも人は幸福にのみ動かざると說きて、人は幸福の外に欲望するものなしと見たれど誤れり、慾望の中には幸福以外或無私の分子あり、勿論イントレストを有するだけそれだけは幸福に外ならずやと言ふものあらんかなれども無根據也。

○

ミルの同胞一躰の感、又はコントの所謂社會的感情、同胞的感情、又はスチーヴンの所謂「同情」等は以て利他的感情(アルツルイスチヅム)の基礎なるべしといへども、未だ根本的、究竟的、元始的のものにあらず同情などいふものは吾人の reflective power の餘程進みたる後の事也。むしろ最始根本的のもの、他に對する無私なる衝動是れ也。其最初の form は父子夫婦の間の感情に見るべし、父母の子に對する、子の父母に對する相互の關係は、單に快感のボンドのみにあらずして、一種の無私なる衝動あり、何とはなしに相抱き相擁せんとする一種の欲あり、この欲は一面快感(即ち興味)に支撐せらるれども、他面快感の客觀的一面ともいふべき衝動あり、左圖の如し。



他人の子を抱くの快感少きを見ても、愛情が快感の根たるを見るべし。愛といふ客觀的衝動あればこそ、同時に快といふ主觀的滿足あるなれ、さればこの快感に動かされてのみ子を抱くといふは當らず、これも其の一面なるべしといへども、親を動かすものは子に對する無私の欲(愛)の一面あるとを忘るべからず。始めて子を持つたものは哺乳の快、抱擁の快を知るまじければ、この場合に親をして子を抱かしむる動機は、其の子に對する愛あるのみ、愛といへば一

種の快感興味あるは否むべからずと雖も、こは要するに其のをりの心狀態の主觀的一面のみ、ミュイアヘッドの所謂efficient cause のみ、これと共に氏の所謂 final cause あるを忘るべからず。而してこの無私の衝動こそ、即ち同情の初步 rudiment 也。親の子に對する何とはなしの一種の無私的衝動こそ同情の萌芽にして、既に同情といへば餘程reflection の進んで社會的意識の進んだ後の現象也。件の無私の衝動の場合には未だ道德無し、同情あつて後道德は生ずれども、而も他に同情して其の幸を圖るもとは無私の衝動より來れる也、何故に他人が吾人を同情せしむるぞと問はゞ、吾人の天性に、他に對する愛あれば也と言ふの外なし。

○

自然の愛には道德なし、同情といふ社會的意識の衣を冠せられて道德となる、他の位地に同情して他の爲をはかるといふ明瞭なる社會的感情加はりて、始めてアルツルイスチックの道德となる也(スチーヴン參照)。(四月十七日)

○

人に對するイントレストは、一種の同情もしくは同胞一體感の萌芽を有す。

○

同情するから可愛いのではなくて、可愛いから同情するのだ。スチーヴンの同情を人心の fundamental fact と謂つたのは考へものだ。

○

(四月二十日)

理性は interest の客觀的一面を掴むの力とも解せらる。是れ理性の一意義。眼前の欲を抑へて未來に向はしむる、是れ二。而して當に成すべしとの ought の命を下す legislature の意、是れ三。二は心理上のパーセプションの意義、二は論理上の比較推理の意義、三は ought to be の倫理上の意義也。

（四月廿二日）

○

高尚な快樂といふ場合に、高尚と思ふ性質に動かされるのは感情に、苦樂の別以外に品位高下の性質の感情あるとを示すものにはあらぬか、一問題也。

（仝　日）

○

品位の感情は全く苦樂の感情に還原せらるべきものか、即ち苦樂が根本の感で、品位即ち高尚とか野卑とかいふ感は、唯苦樂といふ感情のメディアムを經て、即ち苦樂のフォームを通して、はじめて人を動かすものであるか、一問題也。

（仝　日）

○

スチーヴンが、社會の健康は道德の標準也といへば、是れもス氏の言の如く、道德的事實のステートメントなるべしといへども、此く標準をかゝげたる以上は、必然こゝに人の意志の上に "coercive" の力を有する實踐的の意味を有し來らざるか。

（六月二日）

この間十月に至るまで病に伏して筆を抛ちたり。

○

基督の語は常に詩的直觀にて充ちたり、何人も四福音傳を繙きて其の詩趣の溢るゝが如きを感ぜざるはなかるべし。基督は果して詩人なるか、然り基督は最大詩人なるべし、眞の意味にての詩人なるべし、彼れ自ら詩人たるを意識せざりし詩人なり。此點に於いて彼れは、ミルトン、シェークスピアなどいふ世の常の詩人と逕を異にす。彼れは少しも天地人生を詩的に歌ふの意なかりし也、彼れは詩といふものゝ意味をだに解せざりしならん。然も彼れの一言一語が最醇最美の詩となれるは何故ぞ。蓋し天地人生の最も邃き意味は直ちに是れ詩也、大直觀は即て詩的直觀に外ならず、意味深く富贍なるものほど詩的なるもの也。萬象の深意義は、貧なる理路一邊の盡くし得べき所にあらず、ヘーゲルの哲學も、カントの哲學も、其の意味の萬一をだに人に示す能はず、唯之れを髣髴せしむるものは情にて感じ味はふにあるのみ。深く感じ、強く味ふものに取りては、天地人生は益〻親しく溫かなる生命となつて近づき來る。基督が寂寞の境にひとり神に祈りて一切を忘れ去るが如きは、其の天地の inner life に沈潛して、其の溫かなる無限の意味、至醇の香氣に醉うて、幾んど親子相擁するが如き感情の高潮にありしが故ならん。かゝる意味を表したるもの即ち詩となれり、此る詩趣横溢の言葉をからざれば、彼れが心に味ひたる深奥富贍の意味は現し盡くすを得ざりし也。否彼れが心證體達したる境地は、其の詩的言辭も以て盡く

すに足らざるほどの深さを有したりしならん。彼れは詩として表したるにあらず、他人に詩と見ゆるもの、彼れにありては切實眞誠なる實在なりしならん。基督にありては詩即實なりき、詩と實とは彼に於いて一致す。思ふに美意識の側よりいへばこそ詩は實在と袂を分かて、主觀の境を離れて客觀の實在界に入らんか、こゝには詩と實とは益〻其の歩武を接し來たりて相抱かんとするの觀あり。實在に分け入るとの深ければ深きほど、實在はます〳〵詩趣をもて充たさるゝの趣あり、深く天地人生を觀ずれば觀ずるほど實は詩となり詩は實とならんとす。而して其渾として一となれる境、即ち吾等の不完全なる言葉もて表する神といふものゝ姿にあらずや。神は莊嚴なる實在にして又

プラトーンの哲學の美術的表現以て一例とすべし

縹渺たる詩なり、渺しく瞑目して實在に觀到るもの、誰れか其の詩情の溢るゝばかりなるに打たれざらんや。ソロモン云々の基督の語は、即て其の神を譯したる語也、實と詩とは彼れにありては二途ならず、彼れは實を語るに詩以外の言葉を以てする能はざる也。大直觀は詩語也、詩語は實語也、而して是れ眞の宗教家の意識也。テーン等が、宗教は畢竟詩に信仰を加へたるものに外ならずとやうに輕く言ひ放ちて、宗教の根柢の淺きを笑はんとするもの、是れこそ却つて笑ふべき淺語也。眞の詩は眞の實に外ならずと知らずや、實即詩也、實を離れては眞の詩あるべきやうなし。さるを漫然宗教を目して、所謂詩に信仰といふ衣を被らせたるはかなきものといふ、何等の妄ぞ、是れ宗教を排するにあ

らずして詩其者を蔑したる語と知らずや。（十月十五日午前）

○

基督曰く、人なんぢらを解さば如何に何を言はんと思ひ煩ふ勿れ、其のをり言ふべき事は爾曹に賜るべし、是爾曹自ら言ふにあらず、爾曹の父の靈其の衷にありて言ふ也と。

區々たるエゴーの執着を離れ、嗒然己れを虛うして放任せよ、彼れよ是れよと小賢しき細巧小智を弄して、一氣の靈明を暈する勿れ、氣をして常に饑ゑしめざれ、心を清うして太虛と相通ぜしめよ、大事に蒞んで急遽小智巧の細工を用ふる勿れ、唯だ氣を歛め、心を虛うして寸隙あらしむる勿れ。

然らば天地と同根の靈氣は爾の衷に磅礴して、我の固心を破碎し去り、浩氣油然として千萬人といへども我れ行かんの、孟子の說ける境地は目前に現ずべく、一心直ちに神と合して萬象を下瞰し、孩撫し、化育するの大慈の念湧きて、禪の所謂悟の境に入るとを得べし。基督のこの語、禪悟と相通じて面白し。（十月十九日）

○

美意識が宗教的意識と通ずる一點は、其の無我的心狀態にあり、二意識はいづれも我のサルヂーションを本體とす。我の超越は淨樂の大源也、而して觀美も信仰もひとしく我の超越を本質とす。二意識相通の姿はこゝに職由す、されど宗教的意識は我の超越を要件とするのみならず、更に大我と觸れ合するの意識を必須件とす、是は極めて莊嚴なる實の意識也。美意識は然らず、我を超越する點までは宗教

的意識と歩を合すれども、是れ以上の徑路に於て袂を分つ、即ち美意識は大我を欣求せざる也、超越其のまゝの姿、主客觀渾融の象其物に安んじて自足す、是れは縹渺たる淡き意識也(假の意識とはいふべからず)。前者は神となつて我を下瞰し、孩撫するの餘綽を有す、後者はかく我を二元に別つの餘裕なく、我はすべて沒し了す。

(十月卅一日)

○

人の一生は美なる品性といふ大殿堂、大伽藍を建てゆく道行也。美なる品性ほど大なる貴き美術はなし、美術も、宗教も、智識も、すべて皆この大美術を圓現し、渾成する一柱一楹のみ。この品性といふ美術に組織化せられて其の生命を現す一部たらずば、是等は疣贅のみ、無用物のみ。此點よりいへば、美術も文學も哲學もすべて皆品性を飾るもの、潤澤ならしむるもの、豐富ならしむるものとして貴ぶべきもの、又この意味に於いて、是等は道德的なりといふべし、一切の文化は、道德的品性といふ一大美術品に資するもの、宗朝するものといふべし。而してこの美術を大成せんには、どうしても美なる模型即ち理想を掲げ出だして、之れに向つて進まざるべからず、隨つて兒童に道德を教ふるは、命令鞭撻にては不能なり、道德的品性に對する一種の嗜好を起こさしめざるべからず、リゴリスチックに、義務の念に訴へては駄目なり、一種の美感(道德的)に訴へて兒童を導かざるべからず。

(十二　二日)

○

道德上のセチフカルとアルとがいふと年にがの今缺夫工とけとけたいふ古人缺とけとの異りなる所

品性の論理的統一を要す、スウヰフトの如き「矛盾の塊」といはるゝ人もあれど、道德的良心の鋭敏なるものにありては、何處かに其の統一點を有す。

編者曰、次項以下は明治三十四年一月以降の隨筆にして、もと別冊なれども、表題なきと『雜記』(其一)(其二)の順序上、姑らく此卷末に合するものとしたり。

○

宗教は一種の趣味の感に其の存在の根を托す、此の點よりいへば、むしろ美術に似たるふしあり。全くの理觀は到底人心の至深の要求を滿足せしむる能はず、哲學が人に安心を與へ得るが如く思はるゝ、是れ既に其の對境なるものが情の色彩を以て着色せられたるに因る。されば、スピノーザを以て、彼れ哲學に安立せりといふ、未だ悉さず、彼れが所謂サブスタンスは決して冷かなる抽象の塊とのみ見るべからず、彼れが之れに對するに一種高上神祕の感情を以てせしは否むべからず、彼れが情を平かならしむるものは情あるのみと言へるの語、既に之れを證す。ノヴリス曰はずや、スピノーザは神に醉へるの人なりと。

(一月末日)

○

もし情の色を被らざる哲學にして、人に安心を與へ得るとせんも其の安心は消極的なるもの、失望的なるもの、破壞的なるもの、自暴的のものならざるべからず。單なる理心は、人をインスパイアする力を缺けばなり。

(仝日)

○

眞、善、美の三のものは人心の要求の强きもの、されど是れにも勝りて尙ほ要求の至深至大なるものは愛なり、至高者に對する愛の要求なり。神を眞の側より觀る、こゝに知識上の滿足あり、神を善の理想として仰ぐ、こゝに道德上の滿足あり、神を美の本源として其の榮光の姿を描く、こゝに美意識の滿足あり。此くして人は眞善美の神を得て滿足せんとするは思想史の證する所、されど眞に人の心の至深の要求を直觀するの士は、眞善美の意識は未だ全人を滿足せしむるに足らざるを感ずべし。其の尙ほ深處に燃ゆる靈の饑渴の火を打消すに足らざるを感ずべし、其の尙ほ限りなき不足の意識の抑へて抑へがたく、壓して壓し盡されぬを感ずべし。何ぞ。神の愛に對する要求の意識是れなり、神を戀ふるの意識是れなり、一言にいへば、情に於いて、パートに於いて神と一躰たらんと欲ふの心是れなり。プラトーンは、眞善美の理想を慕ふ心をエロース即ち戀と名づけたり。されど眞善美の理想を慕ふの心は、いまだ戀の全意義を悉さず、眞を慕ふ、こゝに學者あり、善を慕ふ、こゝに道德家あり、美を慕ふ、こゝに美術家あり、而も是れいまだ戀の圓かなる姿にあらず。戀の全き姿は神其者を慕ふにあり。眞を慕ふにあらず、德を慕ふにあらず、美を慕ふにあらず、或はまたこの三者のサムとしての理想の一躰を慕ふにもあらず、約していへば、活きたる神、慈眼の神、有情の神を慕ふなり。其の動く所のものは情の火なり、其の要むる所のもの

は情の涙なり。我が情を以て神の情を迎へ、相觸れ相結ばんと希ふ、戀の圓かなる姿といふもの、神人の愛といふもの、思ふに是れに外ならず、宗教家是に於いてあり。曰く學者、曰く道德家、曰く美術家、之れを稱して同じ宇宙を家とせる三人の兄弟といふ、必ずしも誤れるにあらず。されど之れに宗教家の一人を加へて、この宇宙の家族を四人の兄弟とするの、更に〳〵其の眞を得たるを思はざるを得ざるなり。

其の職とする所は神の慈愛を味うて、全土に光明を浴せしむるにあり、この一人の兄弟なかりせば、この世は永へに春溫を失はんとするなり。

理に敏なるもの、或は容易に以上の立言に肯かざるべし。然り、予が以上の言は、理論の上には種々の問題を豫想せる、ものなり。其の第一難點は神の愛といふ事の神祕的立言の根據なるべし。難ずるものゝ意に以爲へらく、神の愛とは何事をか意味するぞ、神なるものはそも〳〵存在せるものなりやといふ、既に一疑なり、よし神存在せりとするも、神と人とはエピクロス派の神の如く、何等の關係を有せざるものにはあらざるかといふ事二疑なり、よし神人間には或關係のあるを許すとするも、愛といふが如き人間的關係を有するや否やといふ事三疑なりと。是の三疑問は、批評的立脚地にあるものゝ自然に提起すべき問題にして、思ふに少しく理心の發達せるものにありては、此かる疑問の敵にかけ惱されて、幾たびか趦趄、彷徨、苦惱、煩悶の經驗を有するなるべし。吾人は、如何に心情の要求切なりとも、一面理性

の儼然たる要求を斥くる能はず、理性の支柱を得ざる信仰は、少くとも理性の要求に耳を假する人なる限りは之れに安立する能はず。是れ豈盲目なる獨斷に理性の耳を聾せしめて、一時のあやふやの信仰に安んぜんとするものゝ解し得る消息ならむや。

さて第一問たる神の存在問題に對しては、こゝに詳論せざるべし、其の神とはふものゝ言ひ表しかた及び內容の、如何に異なるにもせよ、兎も角、天地に一實在の儼在せるは自明の事實として疑を容れざればなり。全然たる物質論、無神論は予の一排し去る所にして、隨つて本論とは何の關係もなし。神既に在りとして、其の所謂神は、人と何等の關係もなき風馬牛のもの、謂はゞエピクロス派の想像せる如く、世界外に超在して、宇宙人生とは何等の與る所もなき獨立の存在者ならざるなきかと問はんか、かゝる交渉なき神は既に神其者の概念と矛盾す、天外一塵の微も、尙ほ吾人と相關相係するの理りを思へば、まして天地の實躰たる神と其の一部たる人をや、打てば響き、響けば應ふる神人微妙の關係を何人か無みし得べき。既に神人の間には、一種至密の關係あるを否定する能はずとするも、其所謂關係なるものを愛の關係なりと見る理由は如何。此くの如きは、餘りに神を人間視したる主觀的見解にはあらざるかといふ新疑問こゝに提せられ來るなり。

この一問を解くは容易の事にあらず、少くとも理性の權威を蔑視せざるものに取りては、彼の習俗的信仰に自足せ

る徒の同情する能はざる、深大の煩悶を以てこの問題と戰はざるを得ざるなり。希臘このかた、神を人視せし幼稚疎雜なる迷信を次第に蟬脫し洗淨し來りし今日の宗教的意識が、尙ほ愛の關係より神を觀んとするは、是れいまだ依然として人視的迷謬の一膜を排し得ざるものにあらずや。假りに知識論の上、純理哲學の上の問題を別として神の存在を許すべし、はた實在論の上より、神と人との相即融會の關係の存するとをも許すべし、否〻神を至善者と視て、こゝに宇宙の道德的秩序の源を歸する見解をも許すべし、而も神と人との間に、愛の關係、情の關係を附するは餘りなる獨斷ならずや。是の如きは、曩に人視見の幼稚を笑へるものが、依然として人視見の範圍を脫し得ざるものならずや、嚴肅なる理性はこゝに反抗の聲を揚げ來らざるか。思ふに此の如き疑問は、少しく此の問題を忠實に解かんとするものに取りて、必然に起こり來たるべし。

予が神を愛と觀る理由は、唯だ此く觀ざるを得ざる甚深の要求の我が心に存するが故といふの外なし。神と情に於いて相抱き相合せんと欲ふ至切の要求は、即て神人間に愛の關係ありといふ所以の根據に外ならず。而も此の要求や、變じ易き、定めなき個人の性癖嗜好等につれて移動するが如き、無根底の要求と同視すべからず。人心の最深處より動きいづる、不可過不可變の要求なり、人類の存する限り、意識の存する限り、世の始めより世の終りまで種々なる形をもて現るゝ普遍性の要求なり。苟くも心を虛うして

わが靈の奥底に沈潛せんか、其處に言ひ知らぬ渴望の念、歎息の聲、景慕の響あるを聽取し得べし。是れそも〳〵何物ぞ、他なし、天地の實在たる神と愛に於いて一とならんと欲ふの聲なり。古より宗教的意識の發達せる仁人君子は、皆この深き要求の聲を聽取し、而して神人合體の域に進みたるものなり、この要求を聽取するものは宗教上の天才なり。人誰れか宗教心を有せざらん、誰れか宗教上の天才を有せざらん、唯其の稟賦の厚薄、發達の高下によりて、この聲を聽取し得ざるものと、聽取し得るものとの差を生ずるなり。

心謙々として常に自己の弱きを歎ずるもの、わが罪障の深きに泣くもの、理想の第一峰に攀ぢんとして幾たびか躓蹟し、幾たびか顚踣し、而も尙ほ涙を拭つて struggling onward の苦を嘗むるもの、一言すれば、凡て心の重荷に泣くもの、誰れか舜と共に旻天に號叫せざるものぞ。我等はこの涙を以て神を呼び、而して相和し、相抱くを得るなり。「世に一人の義人あるなし」誰れか神に向て、我れは義人なり、一點の罪あるなしと言ひ放ち得るものぞ、恐らく釋迦基督の偉を以てするも、自ら一點の疵なき義人なりとは意識し得ざりしなるべし、まして機根の下れる世の多くの衆生をや。苟も自己の罪障に氣づかざるもの、自己の罪障に氣づくも心傲れる虛榮の人ならぬ限りは、何人か此の罍すべからざる心の傷を顧みて慄然せざるものぞ、何人か此の拔くべからざる心の弱點を顧みて、胸を拊つて痛歎せざるものぞ。歎くものは幸なり、其は心の安慰を得べければなり、此の心の傷

を醫するものは神の溫かなる手、熱き涙ならずや。

義人に安慰なし。道德の理想を追ふ義人は、不斷の苦戰あり、不斷の煩悶あり、不斷の心の空處あり。道德の偉なる點は人に奮戰を敎ふるにあり、圓滿に進むの準備を供するにあり。而も單に義人として、道德家として立つ間は、圓滿遂に來らず、不圓滿は道德の本性なればなり。人自ら義人たる間は、心の傷は醫せらるゝの期なかるべし、彼れは喘ぎ喘ぎて尙ほいつまでも喘ぐの外なかるべし、而してこの心の傷を慈眼の涙もて拭ひ去るものは宗敎なり。宗敎は來りて道德の疲れたる手を輔け足を撫して其の限りなく渴ける口に活きたるあめのまし水を飲ましむ。我等苦戰に疲れたる手を揚げて神を呼べば、神は窈窕として我が靈臺の深處聖處に降りますなり、而して情と情と相抱きて一となるなり。人と神との間に於ける愛の關係是に成る。

人は神に對して知己の感をなすに至らずば、其の至切の要求を滿たす能はず、世を擧げてわが心事の耿々を知らざる時、ひとり胸臆の底に於いて神のみぞ知ろしめすの意識に安んじ、而して其の知らざるものゝ爲に泣く。凡そ世に此れ程悲壯なる事はあらじ、而してまた世に此れほど感の至切なるもの、情の至極なるものはあらじ。わが心事を取つて神の心事に照らし、神の涙を取つてわが涙に濺ぐの境、世に若し同情の涙の最も偉なるものありとせば、神人相抱きて知己の感に泣く、此の一境なるべし。ソークラテースが、死に臨みて死刑を宣告せる希臘人に向ひ、嗚呼われは今

逝き、爾曹は生き存ふ、されど孰れが福なるかは惟り神のみぞ知り給ふと言へる、若しくは基督が磔上に於ける、わが神わが神の大絶望、及びゲッセマヂに於ける、父よ若し御心にかなひ給はゞ杯を放し玉への大熱禱、嗚呼何等の悲壯なるホーリードラマぞや、何等の至切なる知己の涙ぞや。唯〻此の一境は、如何なる天魔波旬をも泣かしむるに足る。

古來の仁人君子にして、苟も宗教的意識の發達せるものは、淺かれ深かれ、誰れか此の一境知己の感に泣かざるものかあらんや。彼等の神は……

（編者曰、筆路こゝに消え、數葉の空白を隔てゝ次節の文あらはる。）

○

天才の無意識に筆を行るや、顧みれば歩々其の軌を成して法則となる、自ら作る所のものが、やがて一個の客觀的法則となる。おのづからなる任意の筆にして、而も其は同時に無規律放縱の亂塗抹とならずして、儼として動かすべからざる美術上の法則を供す、これ天才の驚くべき作用なり。

天才は主觀性の強きと同時に、其の主觀性の所造物に客觀的確實性を附與するの驚くべき力を有するなり。宗教的天才の例に見るも、はた同樣なり、彼れが其の已むに已まれぬ胸臆の要求に迫られて慈眼の神を造り出だすや、其は同時に客觀的確實を有する神となつて、こゝに感應作用行はるゝなり、一旦情意の要求に迫られて形を現じたる神が、彼れに取りては、最早まぼろしの消え易き神にあらずして、儼然たる客觀性を具したる、活きたる關係を有する實在とな

るなり。此の場合には神を作るといふことと、神を發見するとは同じ意味なり(嚴密に見て)。一概に人爲と貶しむる勿れ、天才の人爲は主觀性、客觀性の二者を合せ得る神的創造力を有す、彼れは自ら造れるものに、同時に永遠性を附し客觀性を附し得るなり。此點より見て、天才は神の分身なりといふを得べし。主觀の側よりいへば神を造り出だすなり、客觀的にいへば既に在るの神を見出だすなり。神は存在せず、誰れか神を見出だし得るものならんやと言ふ勿れ、天才は其の至切の要求に迫られて神を造り出だすと同時に、之れに客觀的實在性を附するの權利を有するなり、自ら作り出だすと同時に、之れを發見したるなり、更に切言せば、作り出だしたる事が、發見したる事と同樣の客觀性を有するなり、是れを天才の特權となす。既に美術的天才が自ら造りいだせる美の世界は、彼れ自身に取りて客觀的實在たりとせば、何人か其の客觀性を無みし得んや。之れと同じく、宗教的天才が自ら作りいだしたる神、及び其の神と自己との愛の關係等は、彼れに取りては最も莊嚴なる客觀的實在にして、何人もこの客觀性を無みし得るの權利を有せざるなり。理性に此の如き權利ありといはんか、此かる場合に於ける理性の占むる位地、職分は、此かる强大なる權利を有せざるを如何せん。理性が此の場合に於ける職分は、唯だ消極的一面あるのみ、即ち其の宗教的意識の裡に、理性が見て以て非理迷信の分子ありとする場合に、之れを除却し、洗淨して、迷信の滓渣を存せざらしむると、一言せば少

くとも理性に衝突の感を與へざる程の狀態たらしむると理性が此の場合に働き得る部分は唯此の如きのみ。躬竟ずるに、理性は與法者にあらず、事實の供給者にあらず、既に存在せる事實に對して非理迷謬の個處を修正するの力を有するのみにして、此れ以上に出て、事實其者を如何とも（こゝにいふ理性はカントの實行理性とは異なるもむしろ其の純粹理性の意に近きもの）するの力を有せざるなり。情意は事實を供給し創造す、理性は唯だ之れに追隨して其の路を燭らすの明たるのみ、一歩を先んずるものは情意なり、理性は常に一歩を後れて趨走す。理性の働きは所詮フォーマルなり、抽象的なり、內容を給するもの事實を給するもの、thatness を給するものは、情意の衝動的、突出的、創造的作用ならざるべからず。理性は、情意の天才が其の驚くべき創造力を以てプット、フォースしたる、造り出だしたる事實 thatness に規矩（きく）を當てゝ、其の關係を規出し、もしくは其の中に混じたる非理の分子を除却して、出來得るだけ理性の要求に應じ得るやうの恰好 (whatness) に仕直し得るのみ。理性のこの力、決して侮るべきものにあらず、理性のこの力によりて、古來の迷信的宗教が歩々合理的宗教となりつゝあればなり。而れども理性の力は萬能にあらず、理性に萬能の權を附すればこそ、古來信仰對理性の果てしなき衝突を現じたるなれ。理性をして宗教を侵蝕せしむる勿れ、儼に其の守るべき範圍本領に止まらしめよ、此くして二者相輔の作用をなして進むを得べきなり。

理性は、宗教的天才が其の情意の要求より作り出だせる

神、及び神人の關係に對して、苟も衝突を感ぜざる限りは、之れに對して批評するの權能を有せず、ましてや之れを排斥するとをや。唯〻其の驚くべき新事實を仰ぎ觀るを得べきのみ。情意の要求といふといへども、一時の出來心とは異なる、苟も宗教的意識の發達したるものゝ必然にまかせざるを得ざる情意の要求なり、理性が見て以て迷信として排し得ざる、即ち理性の承諾を得たる情意の要求なり、心の深處より湧きいづる至切の要求なり。而してこの要求より作り出だしたる神、及び其の人との關係は、同時に其人に取りての客觀的實在となりて、儼として動かすべからず。此の場合には、まかあらざるべからずとの情意の要求が、即て其の存在の理由根據にして、謂はゞ此かる要求は、客觀的確實性を帶びたる要求なり。理性或は批評して、情意は神などいふ如き超自然物、及び神人間の愛の關係などいふ神祕の事を要求する權利なしといはんか、如何にして理性は情意にかゝる要求の權なきを知り得たるぞ。自ら要求せざるを得ざるが故に要求すといはゞ其れまでにて、理性はこれ以上の何、故、かを問ふ能はざるべし。現に、此く要求の存する事實を、理性は如何ともする能はじ。此かる事は要求すべき範圍にあらずといはんも、其の範圍は唯だ要求する情意其れ自身が自知する事柄にして、要求の範圍を定むる權利は情意自身にありて、理性は唯此く要求せられたる事實のあとを追うて走るのみ。而して其の要求の確實性を知るものは、自ら其の境に躰達して之れを心證する宗教

家自身の、動かすべからざる自識の確信なりとす。

（以上二月一日より八日）

○

現今の基督教界の弊は、第一、教法に局促の弊ある事、即ち、獨善主義を取りて他の無宗教、もしくは異宗教の徒を一概に人でなしと貶するの弊。　第二、形式一邊の信仰にして、他の偶像教徒を、同一もしくは一層甚しき弊に陷れる、否、活ける信仰といふ點に於ては、他の教徒の方が具體的の神を信ずるだけに、基教徒より強き所あり、僞善は却て基教徒にあり、文明風を吹かし得らるだけ弊多し。　第三、趣味のプーアなる事、彼等の心は一律にして內容頗る乏し。　第四、理性の要求など一概に蔑視し、テンから我が信仰を間違なきものとめこんで、自由討究の精神乏し。　第五、故に眞の信仰、敬虔的感情は、教界以外の正直眞摯の眞理討究者にあるを見る、我れは、今の教界に、神の名を聞く毎に脫帽しきといふニュートンの如き篤信者なきを慨す。　第六、餘りに感情を弄び過ぐるの弊、要するにハイカラ的基督教の弊、今少し明瞭に基督の人物其物を紹介し學べよ、基督の眞精神を同胞に傳へよ、從來の傳へかたが餘りに灰殼的にして、無趣味にして、信仰一點張にして、神祕的にして、兎角我邦人の耳に入り易からざりしは事實なり。　今少し基督の人的の部分を傳へよ、自然的人間としての溫情偉大を傳へよ、從來のは餘りに超自然に過ぎたり、孔子釋迦とまづ同一位にひき下げて傳へよ。　然らば其の神性の方面は、自然にして人の肺腑に

沁すべし。邦人に斯教を傳ふる一祕訣はこゝにあり、從來のは餘りインアクセッシブルなりしなり、敬して遠けられしなり。

（三月十一日）

○

宗教學參考書の一二

Dr. C. P. Tiele, Outline of the History of Religion to the Spread of the Universal Religion. (English translation).

P. D. Chantepie de la Saussaye, Manual of the Science of Religion. (English translation).

Allan Menzies, History of Religion.

Dr. C. P. Tiele, Elements of the Science of Religion.

Otto Pfleiderer, Philosophy of Religion, third vol.

○

自我は、觀念としては到底知り得べからず。自我とは活潑潑地の生命なり、活動無限の本躰なり（必しも純理哲學的意義に解せざるも）。而るに觀念として寫し出だされたる自我の姿、觀念として客觀（外界たると主觀裏の客觀たるとを問はず）に突き出だされたる自我の像は、最早生命なき蒼白の色を帶べる、非活動の心現象たるのみ、假令幾分オリジナル、エゴーの面影を寫し得たりとするも、其は要するに、影にして實にあらず、太陽の白熱を受けて反射し出だせる月光の如し、蒼茫としてかすかに原色をうつせるのみ。是れ觀念によりて自我を知る能はざる所以の一。次ぎに、觀念なるものは畢竟 knowing subject に對して意識せらるゝ

客躰にして、意識の當躰其者にあらず。如何に自我を知らんとするも、觀念として描かるゝ自我は、依然として意識の主たるエゴーとは別物なり、如何に深く潜んで意識の主躰其者を捉らへんとするも、意識するもの自身は常に一歩を神祕の帳中に託して其の姿を現ぜざるなり。是れ觀念としては到底エゴー自身を知る能はざる所以の二。然らば自我の本躰は竟に知るべからざるか、然り、觀念としては自我は竟に知るに由なきも、感情によりては之れを知り得。思ふに觀念は觀念其物の本質として到底自我を知るの器たらず。そは必ずしも、觀念はフォーム、カテゴリーの範疇に加被せられて造らるゝが故に、隨てかゝる、フォームに加被せられて成り上れる觀念は、最早原本躰（ディングアンシッヒ）の姿を失へるが故に、その理由よりのみまかいふにあらず。この觀の眞僞は哲學上の問題として輕斷すべきにあらざるが故に、こゝには姑く措き、予の理由とする所は、觀念は唯知識する主體其者の客體としてのみ始めて存在するものなるが故に、既に觀念として分胎せられたる自我は自我其者にあらざるが故に、といふにあり。故に自我は唯〻自我自身が自我自身につきてフィールして知り得べきなり、フィーリングのみ自我の本體に接する唯一の道也。

（五月廿二日）

○

グリーンが、世界を關係によつて成り立てりと見、而して關係は知識といふことに外ならぬが故に、此の世界の實體は自覺的靈智ならざるべからずと見て、思考と實在とを同

一視し去れるの謬を生じたり。されど前いふ理由によつて、關係即ち觀念は、フォーマルのもの、抽象的のもの故、關係其者を直ちに實在とは斷ずべからず、むしろかゝる關係を成り立たしむる根本の實在ありて、而して其は唯〻感情によつてのみ觸れ得べきものなり。

○

知識論として最も透徹なるは主觀論なり、知識の要求にのみ住する限りは、人は到底主觀性以外に出づる能はず、外物の實相そのものは言ふべからず、知るべからず。我等の世界は寫象觀念の世界なり、如何にまゝならぬ觀念ありとても其の故をもて、そを觀念以外のものゝ影響の然らしむる所と斷ずるの根據無し。主觀論は最も論理的、最も透徹なる知識論なり、されど吾人は吾人以外の同胞や、萬有やの實在を、わが觀念の影と斷ずるに忍びず、唯この忍びずといふ一理由をもて、われは外物や同胞の實在を論證す、言ひかふれば道德上の shock なり、又は要求なり。われらの神、われらの悟りは、到底われらの神、われらの悟りなり。自己主觀の色を着けざる神なるものあるなし、實相なるものあるなし、豁然大悟して得たる實體も、その內容をたゞさば、つまりはその人當の人の實體法相なり。何故に悟は發達するぞ、畢竟悟は主觀的のものなればなり。

人は如何に跼くも其の人格以上に超越しつくす能はず、一部自己を超越して、一部自己に立脚するが人間の本性、否特權なり。人は狹き自己の樊籠を脱して、直ちに天地實在

の中心に衝き進まんとす。而も經驗我として存する間は如何ばかり高く神の座右に上り得たりと思ふとあるも、尙ほその實は一面依然たる我なり。其の實在そのまゝの姿と思へるものも、尙ほ依然として我れの觀たる、我の感じたる實在にして、眞の實在は所詮不可測なり、ポウロの所謂わが觀る所常におぼろなりの歎はこゝに生ず。されど人は實在の不可測を知りながら、何故に常に實在に觸れんとして跪くぞ、わが悟は到底物の實相そのまゝの悟りなる能はざるを知りながら、尙ほ何故に悟らんと跪くぞ。是れ要求の飛躍の然らしむる所なり、實在不可知と知りながら、尙ほ知り得べし、知り得ざるべからずと要求するが故なり。わが悟りはわが主觀性を脫せざる悟りなりと知るも、尙ほこの悟は、少くとも一歩づゝ實相に觸れつゝある悟りなり、悟ならざるべからずと要求するが故なり。

情のみ直ちに實在と合し得といふシォーペンハウエルの說未だし。情はた依然としてわれの影なり、情もて攝める神依然として主觀の影を脫せず。基督の神、パウルの神、釋迦の神、孔子の天、皆その內容を異にす、所詮眞の神は知るべからず。而も眞の神は知り得らるといふが、人の根本の信仰、根本の要求なり、この要求この信仰ありてよく人は精進し、工夫し、奮鬪す、一切の活動は皆この一源より來る。知の要求と信仰の要求と矛盾するに似たれど去からず、この場合の信仰は一種のコムプリメンタリー、ノオレッヂ(完補的知識)なり。智の痛ましき經驗を慰藉の涙もて醫するも

のは件の要求なり、信仰なり。信仰は一面主觀性にして一面は客觀性なり、かくあるべし、あれかしの要求は、同時に實在を附與す、是れ神人一致の創造的天才なり。此かる要求の起こるは、此く要求せしむるものゝあるが故なりといふは、既に知識の境を超えて信仰の境に入れるなり、飛躍なり。

○

我と父とは一なり(約翰傳十章三十節)の一語に徵するも、基督に凡神的思想の存せりしと否むべからず。野の百合花、空の鳥に、神のうつくしき靈氣の脈打てるを觀じたる如き、何等旺んなる凡神思想ぞ。彼れは決して神を道德的理想として仰ぎ向へるユダヤ思想の一境にのみ逗れるものにあらず。猶太教では二元の思想が勝つてゐた、神を無限の高位置に据ゑて、人は蛆蟲の如く、地に匍匐した、其の厭世思想の旺んであつたのは自然の數、基督はこの點に超越してゐる。彼れはをり〳〵其のユニーク、コンシャスチッスによつて自分を神の靈境に上し、相抱きて、自ら神其者のこゝろもちを持して天地人生に溢んだ。而して此の境に上つては道德上のストラッグルなく、縹渺として一面無限の歎美、無限の恍惚に沒した、これ彼れが凡神的意識、又美意識の一面である。彼れが獨在の時は、彼れは實に超然世の紛々を忘れて此の美意識の境にあつたらしい、弟子が、山上に基督のトランスフィギュレーションを見て三廬を建てんと云つたのは、この意識を具象に描いたものといつてよい、すべて偉大なる人物、殊に宗教家は、凡神思想と一神思想と、

實意識と美意識と、一元思想と二元思想と、歎美と奮鬪と、恍惚と實行と、遊戯と義務との一面を、一意識にほしいまゝにし得て毫しも芥蔕がない。現世の爲めに血涙をそゝぎて奮鬪するかと思へば、忽ちにして飄然神と翼をならべて大觀の慈眼を放つ。東洋には恍惚の面が多くて實意識が少ない、禪などはその著い例だ、プロチーヌスの如きも東方思想の影響大に與つてゐる。西洋には、實意識即ち神人の二元的思想が勝つてゐて、凡神的方面が尠ない、希臘主義よりもヘブライ主義の影響が多い。ミルトン、バイロン、ウォーヅウォース等皆然り、ゲーテの希臘主義などはむしろ異數とすべしである。基督にあつてもヘブライ主義が勿論勝つてゐるが、流石に彼れは偉きい、優に二面の意識を自在に

し得てゐる。彼の傳を詳讀すると禪的思想の多きに驚くのである。

○

中根淑氏が、伊庭が星を刺す動機を聽いて、飽くまでも彼れが社會人道の爲に兇漢を刺すを善とする自信に感じて、それならばやつて見なさい、私は別に止めはしない云々と言つた由が『二六』新紙上に出てゐる。この淑氏の一言は、東洋道德、殊に儒教道德の根本にして、而も最も短なる點を最もよく暴露してゐると思ふ。從來東洋思想は一騎討の思想が多くて、社會といふとの觀念が極めて薄い、一つは支那印度の歴史的發達の思想に乏しき影響もあらうが、要するに、本邦人の儒教家は個人的である、そしてまた二面ユニ

ヴーサル的の所がある、ストア派によく似てゐる、彼れが理性を重んずるのは是れの天を敬すると似てゐる、天法の我裡に寓する理性を敬するを知つて、其の社會國家に現はれたる神法、もしくは理性を敬するとを知らない。ストア派などが、一面理性の鄉とかッオイスの市遊とかいふものを描ける點は、いたく社會的であるらしいが、其の實、所謂世界主義であつたのである。世界主義の裏は即ち個人主義で、つまり個々理性を具へたる人類が相打寄つて一團の理想境をつくるといふまで、――飽くまでも其の思想は個人的單元的で、有機的思想の影は見えない。儒教はストア派に比して、精密には如何にいつてよいかは知らぬが、兎も角社會といふものゝ權威 objective code ethos といふものは殆んど認めなかつたらしい、其の社禮といふものも、畢竟君主自身かもしくは個人々々の集まれる堆といふ意味にての團躰に附した名であつたらしく、個人以外に社會といふものが、一種の、少くとも道德上の權威制裁を有してゐたとは思はなかつたらしい。こゝが本邦人に影響してゐる、本邦人は、社會といふものゝ單に法律上のみならず、道德上一種の權威を有して居るとを知つたものが少ない。伊庭などは通常の刺客に比して一等上手の、敎育あるものであるが、其の見識の頂點は、社會制裁のないをりは自ら身を挺して兇漢を殺してよいといふ位以上に出でぬ。勿論國家動亂の時とかいふ非常の場合には、非常手段を要するともあらうが、それも近世の倫理思想は、個人が社會に代つて、少くとも

社會の命を受けないで他殺するとは絶對的に許さぬ、……：ヘーゲル風の倫理思想、ヴント風の思想の鼓吹が必要である。

伊庭が、孔子が少正卯を誅したやうな氣取方で、堂々と天誅云々を法廷に呼ばはつたのは、實に僭越至極の沙汰ではないか。檢事などがこの一語を捕へてぐつと其の首根つ子を抑へなかつたのは何故であらう、總じて世の新聞記者などにも、この點より伊庭の罪惡を論定したものがなかつたのは不思議千萬である。

○

今にして思へば、福澤翁が人生觀の二面なるものも、畢竟一神教的道德をもて勝てる泰西思想と、凡神的道德をもて勝てる東洋思想とを、少くとも一意識の中に括らんとしたりし結果なると分明せり。東洋に、西洋の宗教殊に基督教を播かんとするものは、ポーロの故智を襲うて東洋的風習にアッコムモデートし、適應して、其の根柢思想たる凡神ぶりの觀かたを強うして說き込まざるべからず。この用意この覺悟なくしては、基督教の宣傳事業の成功は所詮覺束なし。

（九月廿一日）

○

凡神主義は自力主義なり、自賴主義なり。基督教は僧侶、教會、傳說、儀禮、信條等の媒介を藉らずとも、少くとも神惠心祐を說くの點に於いて（アウグスチーヌスより由來せる正統基督教は自由意志を否む、少くとも自由意志と神祐との

併存を、救に必要と說くはトマス以後の基督敎なり)他力主義なり。少くとも神の無限の恩寵祐助なくしては、人は何事をも就し得ずといふが斯敎の面目なり。この點に於ては、淨土、念佛、一向等と同位地なり。もとより我邦には、古來他力宗の佛敎のみが主もに行はれたりしも、一面には儒敎ありて聰明なる人心を支配し、而して儒敎はやがて一種の凡神敎なるとを記せざるべからず。少くとも希のストア派と酷似せる點において、其の總じて凡神的趣味を以て勝れたる事は否むべからず。ストア派は、自然と神と理性とを同一に見て、我が一念の腔子裡のもの、即ち天地の神性に外ならざるが故に、我が理念を旺んに働かしむる事、やがてツォイスの神の活動に資し、其他のあらゆる賢者聖人の德を幇くるものと觀ずるなり、其の一如凡神の思想歷々たるものあり。儒敎に於いても、其の所謂天なるものゝ解釋が或は人格的となり、或は抽象理(理、氣)となりて樣々なれども、要するに性と天道とを一如に見て、我が裡の天理を發揮するとを要事としたるなり。其の立場は飽くまでも希臘的にしてペブライ的にあらず、一元的にして二元的にあらず、性を盡くし量を滿たすといふと、其の要義なり、自己主觀の中に天理の光明を認めて之れを磨き立つるにあり。されば こゝに要する道德は獨立心なり、克己なり、自制力なり。猶太敎、基督敎が、何れかといへば從順、服從、謙虛、抑損を美德とするとおのづから異なる。

(仝　日)

○

禪また我が中流以上の人心に最も影響を及ぼせり

○

一通り我心に肯き得る程に宗教上の理窟が發見し得られれば、其上は宗教的意識の薫染に力むべし。理論は其本來の性質として人に安心を與へ得るものにあらず、安心を與へ得るものは實際の宗教意識なり。情を安んずるものは情なり。理は關係的のものにして窮極なし、情は實躰的のものにして窮竟の安慰を與ふ。

一、人を愛する前に、まづ神の愛を仰ぐ。

一、愛は感應なり。

一、是れ天よりの聲唳なり。

雜記其一畢

雜記其一畢

一、福德問題
一、宗教意識の二面(凡神思想と一神思想)
一、伊庭の天誅論(法律思想の缺如)
一、基督教傳道の方法難
一、害惡論(evil) Theodicy.
一、禪の倫理學
(平等と差別の理想、例へば儒教等の道德思想とを繼ぎ合さんとせる企圖の失敗 ——童子教、實語教 —— 直覺派との類似 —— 大西氏の倫理、シヂ氏參照 —— 心學。)

雜記 其二

○

凡神教は、一切萬有を神聖視すると共に、一面又之れを平凡化するものなり。糞土も、草木も、魚介も、人獸も、一切神的のもの、具佛性のものとする極は、糞土も人獸も同位同價値のものとなりて、其間に高下の別なく、此の差別の世間相の森然たる別は、こゝには一切押しならされて蕩々無色のものたらんとするなり。是れ神聖視の裏が平凡視となれるものなり、禪の思想に於いて之れを見るべし。(九月廿五日)

○同情論
○自由意志論
○直覺論難(本然自明說)
○快樂
○結論を急ぐ國民、そのシの弊ザ井ック氏の言、大學、慶應義塾、宙外氏の

時論、宗教家にも此弊あり

凡神主義は內省的、主觀的にして、一神主義は律法的、客觀的なり。一は自足滿圓と立し、他は謙虛不滿足を觀ず。一は直覺頓悟を賴み、他は一歩々々神に近づかんとを望む。一は萬法皆善と歎美し、他は戰々として神意神命是れかしこむ。一はアリストテレースぶりの大志の德を理想とし、他はパウロぶりの謙讓を美德とす。一は自意識に富み、他は我れをすて〻神に從はんとす。其の弊よりいへば、一は自惚となり、傲慢となり、驕泰となり、他は卑屈となり、柔弱となり、女〻しさとなる。一は一切萬法に冷淡無頓着となり、世間法を蔑視し去りて疎蕩の人とならんとし、他は餘りに差別の側に執着し過ぎて清淨敎徒的峻嚴とならんとす。一は一切を美的に觀じて嚴肅の人事をすてんとし、他は一切を道德的に觀じて美的縹渺の趣味を失はんとす。一は自己の裡に神を觀じて自らを高うするに過ぎんとし、他は神の中に自己を沒して自らを無みするに過ぎんとす。(仝日)

○

利己的、社會的の別は、其事の性質及び之れを爲す當の人の動機によりて決せらるべきもの、直接に國事に奔走する士にても、もし其の動機が或利福を得るにあらばこれ利己的なり、又直接に自己一人の事にても、もし其が社會的性質を着し、及び此かる動機もてなさるゝならば其は社會的なり。要するに利己的といふ事は、事に對する活動以外の快感を欲求する意味にのみ限るべきものなり、これ以外の事にては何物何事も利己的の稱を附せらるべき謂はれな

し。食する事も、讀書する事も、遊戯する事も、其が快感そのものを直接目的とせざる限り、決してこれに利己的、私欲的の名を附し得らるべきものならず、是等皆嚴にいはゞ社會的の事なり、賑恤慈惠の事と同樣に社會的の事なり、唯後者は前者よりも一段社會的事業に近きの差あるのみ。要之、利己的とは客觀の活動以外の快感のみを目的とするか、又は社會的、爲他的の事を妨げたる場合か、此二者の場合に附名せらるべき事にして、これ以外には利己的といはるべき理由なし。自愛、他愛、共に社會的の一語もて括り得らるべき事にして、何れも正當の倫理的範圍を有す。自愛は一層爲我自衞に近きの故をもて、他愛爲他より價値少なしとはいふべからず。爲我にもせよ、爲他にもせよ、もしそが單に個人的意義をのみ有する場合には未だ道德的とはいふべからず、そが道德的價値を附する一標準は、社會的目的、もしくは社會的意志を成ずるの多少如何に存す。こゝに社會的意志といへるは、大我といふも可、眞我といふも可、要するに自他以上に抽きて自他の理想となり、標的となるもの、自他の個々人は唯だ此の理想を揮捧し、圓現してのみよく自らの本性を發揮し得るなり。自愛主義、愛他主義の對峙は此くしてこの一原理中に沒せらるゝなり。（仝　日）

○

病ある身には、夜氣の冷を恐れて障子はたと締めきりて、蝸牛の謀に餘念なかりしものから、今宵は好き月なりといふ人の噂聞きては、堪へられず心狂ほしげに障子引き明け

て裏庭に下りたつ。げに心ゆくばかりの月夜かな、天一面は宛ら大箒もて掻き掃はれたるあとの庭砂の幾千筋のはうき目、淨う堅に走りたらんやうに、さらりと淡き秋の色、風少しありて木〻の梢にそれと聽えぬほどのうなり淋しく、冷やりと襟もとを吹いて行く。蟲の聲〻も哀れなれど、尙ほ庭の梢の、やうやう痞せ細りて、扶疎として搦み合へるが、宿しあへぬ月影を庭の面に落して段々模樣を織りなせるこそ、何となうあみ〳〵と秋のこゝろ覺えしか。

（九月廿四日夜）

○

世に害惡は何故に存するぞ、此の問題は頗る閑問題のやうなれども、……。

○

一、禪は吾人に道德の理想を與へず。二、禪は世間の相對理想を平等化せんとするの弊あり。三、禪は世間の相對理想に須つ事なくして、能く一念觀省の中に一切の道德法を發見し得べしと唱へ得るや、即ち禪は陽明一派の唯心說と同じく、一種の直覺派を唱へんとするものなりや、もし然りとせば、こゝに直覺派と同樣の批難を蒙るを免れざるべし。或は禪にして、直覺說に與みせずして尙ほ世間の道德法に參し資するを得といはゞ、そはたゞ形式的運用の一法としてなるべし、言ひ換ふれば、禪は相*對理想が吾人に與ふる道德律を以て其の理想とする外なくして、唯そを發揮實現する運用の上に、或特殊の効力を有するものなり、若しくは道

*而してこの相對理想は歷史的人文、即社會の制度風尙中に標現せられたる絕對理想の一部

（現實となれるを基礎としてその上に構成せらるべきものなり）

德法を實現するに、一種特有なる禪的動力を與へ得るものなり。而も禪の道德的本領は唯これのみ、禪は須らくこの本領の一域に安んじて、其の固有の特色を發揮すべく、自ら一切を網羅して、人をして禪だに脩すれば倫理の事足るとやうに思はしむる勿らんを要す。朱子の禪難大に見るべし(而も朱子自身一種の直覺論者としての弊を有するなり)。さて件の禪の特色とは、第一は其の一切差別の what-ness を ぬき去りて、唯だ其の實在其者たる thatness を意識せしむる點にあり。差別相の個々の色彩に眩眩する間は、吾人は本躰の觀念に達する能はず、一切を擺脫して(果して一切を擺脫し得るや否やは心理上の難問なるべしといへども、兎も角もかゝる一種の努力によりて)はじめて吾人は赤裸々の色相なき、而も何か禦ぐべからざる、打ち消すべからざる一種の物の實在を認むるを得、而して此の物に觸れ得たる意識は、たしかに一種の勢力なり、一種の解脫なり、一種の救拯なり。第二は、其の融會無碍の意識なり。一にして多、多にして一なる超時間的なる精神作用を圓滿に作用せしめ、發揮せしむるは禪の特殊相なり。執着は動もすれば人をして自然の因果律に墮せしめんとす、この羈軛以外に高踏して、如意に自性の神を全うするものは禪の特殊効力なり。此二點は禪の二特色にして、而もいづれも平等道德なり、而も其は世間道德に加被せられて始めて其の特殊効力を發す。世間道德は禪の動力を仰ぎ、禪はまた世間道德を差別界より仰ぎて其則に率はざるべからず。

○　（十月四日）

意識ばかり靈妙不可思議のものなし。意識は超自然のものなり、超時間的なり、一定の圖式を以て一切外來のものを統整融合す。其の形式の側を見れば、直ちに無限に接して天地萬有の內容を呑み盡くすも、尙ほ其の無限の渴を叫ばんとするなり。玲瓏たる其の一如性は、以て物の例ふべきなく、天下また此くの如き摩訶不可思議のものあるべしや。無限者の姿一氣に凝つて、下土肉身の中に其の俤を映し出だせるものともいふべきかな。而して禪は實にこの靈妙なる意識を縱橫に圓轉活動せしめて、其の因果律を高踏せる超自然性を遺憾なく發揮せんとするもの、靑山白浪起、井底紅塵颺底の倒逆觀をもて自然界の因果の順序を飜し、以て人をして事相以上に跳脫せしむ。意識もと超自然のもの、超時間のもの、如々の一境直ちに絕對者の俤の凝つて映じいでたるもの（ライブニッツがモナッドをもて天地萬有を宿せる鏡と見做せるの見、こゝには因果の律に局せらるゝとなく、善惡なく、美醜なく、前後なく、上下なく、大小なく、一切の關係なき蕩々無色無相の一境、而も萬事相を包んで運用無限のもの、浩然未發の大勢力たる實在なり。人をしてこのものを有するとを知らしめ、且つ之れを圓滿に其の性を發揮せしめんとする、即ち禪の目的なり。（十月六日）

○

心學者中澤道二、道を說明して曰く、

道とは何ぞ、雀はちう〳〵、烏はかあ〳〵、鳶は鳶の道、鳩は鳩の道、君子その位に素して行ふ外に願ひ求めはない、その形の通り勤めて居るを天地和合の道といふ。

柿の木に柿の出來るもあい〳〵、栗の木に栗の出來るのもあい〳〵と口舌言はず、たゞ素直に和合の道、この外に道はない、それが神道、それが儒道、それが佛道ぢや、この外に道といふはない。聖人は天地同根、同性なるが故、一切萬物を心として、その外に別に心はない、學問といふはその道理を明めるのぢや。君子の學は廓然たる大公物來りて順應する、心は虛靈不昧にして萬事に應じて跡なし、たゞ應ずるばつかり、主人に向へば主人ばつかり、親に向へば親ばつかり。この心は平等一枚、己れが〳〵はない、この道理を合點したを佛家で成佛の相といふ、これを道ともいふ。道といふは順應するばつかり。

これ一種の直覺派の口吻なり。一心無我の狀態にありだにせば、道は洞然として心眼に映じ來るといふにあり。禪の倫理觀はたこれと同じものなるや否や。（十月六日）

（道二翁道話）

○

福澤翁の『學問のすゝめ』の一節を抄す。曰く、

古來日本にて討死せしものも多く、切腹せしものも多し。何れも忠臣義士とて評判は高しといへども、其の身を棄てたる由緣をたづぬるに、多くは兩主政權を爭ふの師に關係するものか、又は主人の敵討等に由つて

花々しく一命を抛ちたるものゝみ。其の形は美に似たれども、その實は世に益することなし、今文明の大義を以てこれを論ずれば、是等の人々は未だ命のすてどころを知らざるものといふべし。元來文明とは、人の知德をすゝめ、人々躬からその身を支配して、世間相交り相害するともなく、おの〳〵その權義を達して、一般の安全繁昌を致すをいふなり。されば彼の師にもせよ、敵討にもせよ、果してこの文明の趣意にかなひ、この師にかちてこの敵を滅し、この敵討を遂げて、この主人の面目を立つれば、必ずこの世は文明に赴き、商賣も行はれ工業も起りて、一般の安全繁昌を致すべしとの目的あらば、討死も敵討も尤のやうなれども、事柄に於て決してその目的あるべからず。且彼の忠臣義士にも夫程の見込はあるまじ、唯因果づくにて旦那へ申譯までの事なるべし。旦那に申譯にて命を棄たるものを忠臣義士といはゞ、今日も世間に其人多きなり。權助が主人の使に行き、二兩の金を落して途方に暮れ、旦那に申譯なしとて思案を定め、並木の枝へふんどしを掛けて首を縊るの例は世に珍らしからず。……然るに今彼の忠臣義士が、一萬の敵を殺して討死するも、この權助が一兩の金を失うて首を縊るも、その死を以て文明に益することなきに至りては正しく同樣の譯にて、何れを輕しとし、何れを重しとすべからざれば、義士も權助も共に命の棄所を知らざるものというて可なり。

是等の擧動を以てマルチルドムと稱すべからず。余輩の聞く所にては、人民の權義を主張し、正理を唱へて政府に迫り、その命をすてゝ終をよくし、世界中に對して耻づることなかるべきものは、古來唯一名の佐倉宗五郎あるのみ云々。

○

午後三時ごろ例の天神の森に散歩す。大久保富士の崩されて小高き平地となれる跡に立てば、おもしろき景色眼の前に擴る。我が立てる邱は、杉の古木の高う枝を交へて、こんもりと日影を避けて、小暗きに瞰おろす一面の平田は黄金色なす稻穗たわゝに、横さまに波を打つて、その中を一水白う、行く足を止めたる靜かさ。すべて秋日和のぽつかりとしたる溫かき景色なり。小暗き處より明るき處を瞰おろす景色は何となう心地よきものなり。新宿の森は雨後の色すゞしく、遠くは白雲のやゝ險しげにもくゝと湧きたるも、流石に高く飛びて秋意をつゝめる、久しく家にとぢ籠りゐし我が眼には新しき感なり。

（十月八日）

○

グリーンは萬有を關係より成ると見、而して關係は、其の關係以外に立つて之れを關係せしむる意識作用を含めりと見、此くして、自然界に對する吾人の知識及び自然界そのものをもて、超自然なる自覺力の構成し出だせるものと見たるなり。此の論理を推して、彼れは關係即思想、思想即實在と觀じたりき。思想と實在とを同一視せるヘーゲルぷ

りの彼れが思想の難點は、關係の側のみを見て、關係せしめらるゝ物の一側を看過し去れる點にあり。關係は物を離れて獨行する能はざる無力、無動のものなり、むしろ物と物との間に存する性質と見るべきものなり。されば此の物の側を抽きて、唯だ物の屬性たる關係のみを實在其者と同視したるグリーンの說の謬れるや論なきのみ。實在とは關係即ち思想なると同時に、そはまた物たるなり、この二のものを併せたるもの實在なり。物とは何ぞ、意志にはあらざるか、根本的衝動にあらざるか。バルトマンの說この點に於いて兎も角穩當に近きものあり。

（十月十日）

○

倫理學は理想の研究を主題とする點に於て規範學と云ひ得らるべし。理想は未だ全く實現し了らざるが故に、絕對至上の規範法則の何たるかを明確に述ぶるとは難事なれども、過去の道德發達の跡を研究して、其の大體の歸趨を知ることを得べし。理想の發達といふことを假定せずしては、倫理の考究は無益也、但し其の如何なるものなるかを研究せんには、科學的方法によるの外なし。理想を含める道德的事實は、古今東西おの〳〵其の相を異にすべけれども、其の大體の上の潮流の傾向は歷々指すことを得べく、横に並べてこそ今の道德的判斷は異なれ、之れを縱に發達の側より觀すれば、其の向上の標は漸く一致し來たり、差異はむしろ消えて一致點のみ際立つべし。倫理學を規範學といふは、畢竟其が理想、委しくは理想實現の跡を研究して、其の如何

なる方向に走りつゝあるやを研究するに因る、而してこれを學といふは、つまり伴の理想を研究するには、科學的研究を用ひざるべからざれば也。されば倫理の研究は、理想の形式を研究するにあらずして(カントはこゝに失敗せり)理想の内容を研究するにあり。而して内容は歴史的に發達しつゝあるが故に、之れを研究するには後天的、事實的、科學的一途を取るの外なし。此くして大躰の理想の潮流を捜り得たらば(これまでは記述的倫理學の部面、而も其の事實なるものが判斷の意識即ち理想の含まれたるものなるが故に、この點に於て他の自然科學とは勿論異なる)更に其の以上に一躍を試みざるべからず。即ちこゝにては、どうしても哲學的思辯、もしくは宗教上の信仰等を傭ひ來りて、相待理想を築かざるべからず(絶對理想は到底設置すると不可能なり、吾人は唯だ一時代一社會に於いて、あらゆる人心の要求を容れて、向上の一路を指し得べき底の理想を設くれば足る、發達を約束とする社會は、早晩この理想を無用として抛つに至るべきは自然の數なり)。而してこの建設的方面も倫理研究中に含まるゝが故に、此の意味にていへば、倫理學は更らに一段嚴密なる意味にて規範學と稱せらるべし。而してこの上に更に應用倫理の側を含めていへば、こゝにも規範學の語は當て篏まるなり。つまり倫理學には此の三方面ありて、而して其のいづれの方面にていふも規範學の語を用ひて差支なしと思はる。

（十二月十日）

○

理想とは、つまる所實在の單なる形式なり、筋書なり、梗概（アウトライン）なり、如何なる理想も、理想としいへば其の本質上漠然たる形式に近きものならざるべからず。自由といひ、平等といひ、平和といひ、若しくは完全といひ、理想我實現といひ、オイダイモニアといひ、ハイリヒカイドといふ、皆要するに漠然たる形式的の語に過ぎず、されどこれ理想といふものの性質上已むを得ざるとなり。理想は到底現實の如く明瞭なる內容を有するものにあらず、具象的理想の語は矛盾語也、理想はモーアのユトーピアなどの如く、燎然火を睹るが如く畫きなさるべきものにあらず。此かる具象的內容の一々指し得らるべき底の理想は、忽ち現實と衝突して破れざるを得ざるべき理想なり、即ちむしろ空想といふべきものなり。理想とは、要するに、大躰上吾人に指導を與ふるもの、吾人が實際の境に於いて一つ〳〵其內容を塡めゆくと、取りも直さず其を實現するの義なり、謂はゞ吾人は吾人の實際的生活に於いて、理想といふ略圖に一々詳細の地名を點ずるなり。理想は此くの如く一種のアウトラインたるに過ぎざれども、其の人生を指導して高處に躋せしむる力は偉大なるもの、理想といふ略圖なくば、人はつひに其の進むべき針路を見失うて左迷右誤すべし。理想は現實となつて始めて其の內容を塡し來たるといへども、現實はまた理想によつて目ざす高處に導かるゝなり。

人は如何にして如是理想を有し得るぞ、理想は何處より來るぞ。或は以爲へらく、理想は人の造る所のものなりと。

げに人は未現の理想を自ら想ひ設けて之れを心上に掲げ得るものなれば、この意味にて人は理想を造り得といひ得べし。されど、人は如何にして此くの如く理想を意識裡に想ひ浮べ得るぞ、人の理想を想ひ浮べ得る究竟の根據は如何。思ふにこの一問に對しては、予は一番の哲學的飛躍を試みて、理想は實在より來ると斷ぜざるを得ざるなり。理想は實現され得べきものなれば空想にあらずと人はいふ、されば何故に一歩を進めて、理想は實在のひゞきなり、理想は實在を豫想すといはざる。嚴密に云へば、人は何物をも創造するの力なし、詩人の創造力といふもの、實は直觀力なり、洞察力なり。如何なる天才も無より有を造る能はず、彼等の創造し出す理想の天地は、彼等が詩的洞觀の力をもて實在の深處より搜り出だせるものなり、プラトーンぶりにいはゞ、曾て面のあたりに觀じ、實有を憶ひ出でたるなり。創造は觀るとseeingなり。思ふに、既に實在として存せざるものが、何故に吾人の意識に理想として現ずるやを解する能はざるにあらずや(グリーンの論の如く)。時間的に理想として吾人の意識に現ずるものは、實躰的にいへば既に天地のdeepest realityとして横はれるものならざるべからず、然らざれば吾人が理想を有するの理由如何にしても解しがたし。

○

理想は實在のウツシなり、再現なり、略圖なり。吾人は理想を有するといふ、其の事よりして實在(神)を抽き得るなり。

理想は、單なる理想といふ事以奥に、深奥なる嚴肅なる實在を暗示するにあらずや。

○

自然に生命ありやといふ問題は、吾人が自然に對して生命を感ずといふ主觀的事實によりて始めて解釋せらる。即ち自然に生命ありといふとは、つまり自然に生命ありと感ずといふ主觀的事實によりて始めて解釋せらる、即ち自然に生命ありといふとは、つまり自然に生命ありと感ずといふ事に外ならず。此かる感、もしくは味ひを外にしては、自然に生命ありや否やの問題は到底解けざるなり、何となれば、生命などいふものは、知識をもて知り得らるべきものにあらずして、唯我が意識上の感、もしくは味ひによりてのみ知り得らるべきものなれば也。林檎は旨しといふとも、單に知識のみよりいへば何の事とも分らざる立言なり、如何に化學的分析を施すとも、旨しといふ一種の性質は發見し得られざるなり。こは知識の境以上の事なり、感情、趣味、性分内の事なり。神は愛なりといふ立言も、單に知識の點よりのみいへば無意義なるべし、されど宗教家の感情には、たしかに神は愛なりとひゞく也。知識は、如何に其の鋭鋒を磨して其眞否を檢せんとするも、到底水を切り空を搏つて甲斐なかるべし、何となれば愛といふ如き性質は、味の上のと、感情の上の事にして、知識の對境とならざるとなればなり。知識は此場合には、須らく其の本分を恪守して讓遜の態度を取るべきなり。彼れは事實を立するの能なくし

て、事實を趁うて走るものなり、彼れは件の場合にては神の愛の有無を斷ずるの權利なし、愛は有とも無とも彼れの判斷以上の事なれば也。隨つて吾人の情意が立する此の一新事實に對しては、唯其創造的天才に驚歎して、俯して敬を乞ふの外なきなり、之を打ち消し、もしくは否定するが如きは不可能なり。神は愛なりといふ事は、神を愛なりと感ずる意識上の事實に成り立つ眞理にして、之れを打たんとするものは、亦事實の武器を以て立ち對はざるべからず。理性や知識の武器は、こゝには何の用もなきなり、即ち純乎たる實際問題にして理論問題にあらざる也。すべて味ひの事、評價上の事は、主觀に甘しと感じ、主觀に生命を感じ、主觀に神の愛を感ずる其事が、即て不動の眞理となるものにて、理窟の沙汰は毫しも與らず、もし自己の意識に省みて、眞に神の愛を感ずるならば、其の感其者が、やがて神に愛ありといふ唯一の證據となるにて、つまり意識上の事實もて之れを決するの外道なきなり。砂糖を甘しと感ずれば、其れが即ち砂糖は甘しといふ唯一の證據なり。此場合に、甘しといふ味ひは舌上の感にして、砂糖其者の客觀的性質にあらざるが故に、件の立言謬れりといはんかげに知識論上嚴密にいへば、甘しといふ性質は主觀的のものなるべし、されどこの場合に主觀的、客觀的は必要の問題にあらず、よし主觀的なればとて、甘しといふ意識上の事實は打ち消すべからざる事實として許さゞるべからず、甘しの性質は砂糖其者には無くして、主觀の感なりとするも、即ち其の客觀的なら

ぬといふことは、毫も吾人の意識上の事實を輕重するに足らず、甘しといふ意識上の事實さへあれば吾人には十分なり。詩人が自然に生命を感ずるも同一理なり、或は自然其者には如是生命は無しとするも（この無といふ斷定も、實は知識理性のみにては下しがたき斷定なり、生命有無の斷は知識の職分以上の事）、この一事實は毫しも詩人の感ずる價値に影響せざる也。若し自然に對して眞實に一種の生命を感ぜんか、この意識上の事實が詩人に取りての唯一無價の寶にして、彼れはこの上に其の客觀的根據を問はざるべし、彼れに取りては、この意識上の事實が客觀的事實と同樣の價値を有するが故也。よし客觀的に自然に生命ありとするも、そがもし詩人の意識に生命となつて響かざらんか、

*富士の崇高は人にあり、如何なる理性の權威も……

これ詩人に取りては自然に生命無きなり。*彼れに取りては意識上の事實が唯一の事實なり。神の愛の客觀的有無は、以て眞に神愛を感ずる宗教家の意識的事實を如何ともする能はず。この場合には、主觀的事實が取りも直さず客觀的事實と同等の價値を有する也、こは空想にもあらねば虛妄にもあらず、此の點よりいへば之れを客觀的事實といふも毫も差支なし。富士山に對して崇高の意識を感ずるものあらんか、よし富士山其者には崇高の性質なしとするも、其の意識上の事實として吾人は心躍るを禁ずる能はざるなり。フォイエルバハの如きは、神の諸性質が吾人主觀の產なる故をもて其の價値を蹂躪し去らんとすれども、主觀の產なればとて之れを一概に空想視するは謬見なり、否

すべて評價上の眞理は主觀的にして、而も主觀的なればとて、其は一個不可動の事實として、權威もあり價値もありて人生を支配するなり。

然らば宗教上の意識は、人〻の感さま〳〵のものにして、我れまか感ずまか意識すといはゞ、其れが究竟の事實にじて、是非の論は一切こゝに滅びんと疑ふものあらん。一應尤もの疑ひなれども、感情にもおのづから客觀的規定あり、健否、高下等は其規矩準繩なり。砂糖を辛し苦しといふものあらば、其の感覺は間違ひなりと斷じ得ざるにあらざると同じく、宗教上の事にも一種の判斷あり。こは知識上の判斷にあらずして情本具の判斷なり、高しと感ずる情をも卑しと感ずる情を批判するが如し。基督の意識は何人も宗教的經驗を有するものより見れば、最高の宗教意識と斷ぜらるゝなり。されば吾人は須らく劣等の意識を修養して基督の意識に躋らざるべからず。宗教は、要するに修養にして研究にあらず、感情の薫化鍛錬にして理窟三昧にあらず。

（十二月十六日）

○

自戒に曰く、年四十まで廣く讀書し、且つ天地人生を觀察し、四十以後にして始めて自ら得たるものを公にすべし、其れまでは何事も準備的研究と心得べし。今より三十四歳まで語學と衛生とに全力をそゝぎ、あと六年の間に古今の大著を精讀すべし。神もし予に四十五歳までの壽を假さば、宗教哲學、知識論、倫理學、世界三聖觀の著述を成就せしめ

よ。此の覺悟をもて一念不動、世の浮辭空言に惑ふことなく進むべし。

"We feel that we are greater than we know."

○

自由が自由たらんには、必然を備うて自ら衞らざるべからず。絶對の自由は自由無きに等し。自由は自己といふ中心を豫想す、自己なき所には眞の自由あるなし。神といふとも、もし自由を有するものならば、其は自己人格を有するが故ならざるべからず。然らざれば放恣專縱底止する所なく、所謂 arbitrary will となるべし。自由ならんとせば自己を要し、而して自己の內容は必然則、因果律に服せざるべからず。此くして一定の中心ありて、よく自由の行動をなし得べし。されど此く自己性格は必至則を含めるものなりとせば、自由撰擇なるものは不可能事となり、よし人は通常必至論者の說の如く、外部の諸勢力の因果に縛せられざるまでも、自己性格の鎖に縛られ、自己性格の發表以外には、自由に何事をも選ぶ能はずとせば、是れ豈一種の必至說にはあらざるか。一切の行動、皆因果の支配を脫せずとは、吾人最强の信仰にして、吾人行爲に於ける、はた此の一律以上に拔く能はざるを信ぜざるを得ず。シヂウィックは、人は從來の性格に反して、一事を自由に撰ぶは甚だ難しといへども、而も此の難しといふ事と、不可能との間には、踰越すべからざる深淵ありと言へりしが、予は此の說に信を置く能はず。性格の因はどこまでも其の不可撓の自律を押し

通して吾人の意志に影響すべく、吾人の意志如何に不羈の力ありとも、この自然律以外に立つ能ふまじ。勿論自覺して一事に就く場合には、其の選擇作用は外より押付けに、意志に迫りて一事を選ばしめたるとは異にして、こゝに我は、これを自由に撰びたりとの意識伴ふべく、決して之れを機械的必然作用とは同視すべからざるも、尙ほ其は因果律プラス自覺といふまでにして、自覺が因果律(性格の必至といふ意味にての)に反きて自由選擇をなし得るにはあらず。選擇後より見れば、如何に性の必至に反きて反對の側の事を自由に選びたるやうにても、尙ほそこに一種の因果的法則は儼然として行はれたるを見るべく、つまり人は性の必至則に率うて行ひしものなると分明すべし。然らば人には到底自由なきか、曰くあり。人は因より來る果を否む能はず、また緣を去る能はず、されどよく因其者を根本的に徐徐改造し得るなり、品性の必至則に反きて行ふは不可能なるも、品性其者の根本を徐々改造し得べし。こゝに人の眞自由あり、インテリジビリチーあり。

○

悟らずして法を說く、嗚呼われ何日までか此の矛盾を敢てすべき。今日より斷然一心の大自在を得るまで、專念一向に觀心自脩すべき也。

○

世に出でゝ働く、まだ早し〳〵。少くとも古今東西の大思想を涉獵して、身を其上に挺する位地に立つて後、はじめ

て猛然として世に打つて出づべし。今の中は脩業が肝心、如何なる誘惑にも抗して自ら心を錬り、思を覃うして、隱忍靜養打成一片の純熟に至つて始めて筆を劒とすべし。

○

わが心、融會無碍の境に至つて、はじめて他を濟ふを得べし。

○

他を罵らんとせば、まづ自己他を罵るの權利ありやと問うて後罵るべし。

○

默の一字を嚴守すべし。

○

愼獨といひ、守一無適といひ、誠一といひ、常惺々といひ、打成一片といひ、純一無雜といひ、定靜といひ、無極而太極といひ、浩然の氣といひ、太虛といひ、廓然大公といひ、すべて是等類似の語は、皆意識の集中を指すの語なり。孟子の所謂、放心を收めて意識を一點に引きしめ、明覺靈光の一體即ち心王の統一を旺んにして、一切の雜慮を整御せしむる一種の意識態の謂也。禪儒(殊に陽明一派)は皆この意識集中敎の一種也。

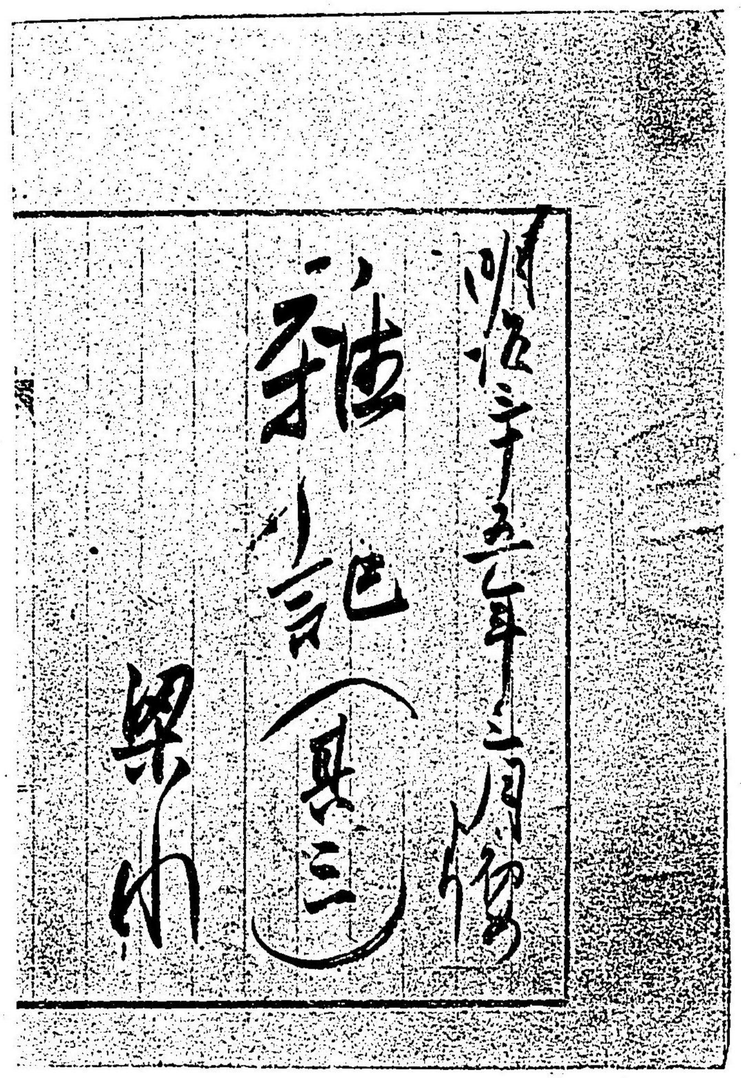
○

執着はすべて惡也。善にすらも執着するは惡也、何となれば、所謂善は多くは相對善なるが故に、一善に執着する結果は大善をおろそかにする弊を來す、眞に執着の是とすべ

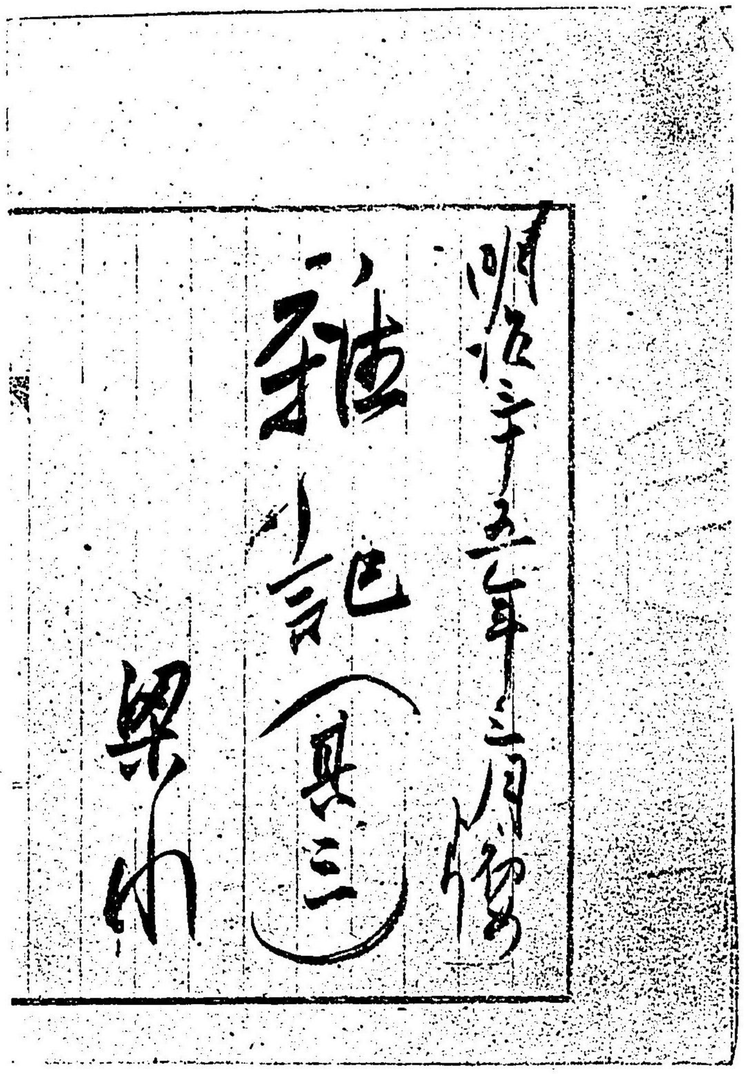
きは、唯一絶對善に對する執着あるのみ。然れども此唯一の執着を操つて迷はざらん爲めには、他の一切執着をすてざるべからず。これ禪儒の、心を雜慮に沒せずして誠一を守り、空々を執れといふ所以也。禪儒は少くとも、唯一絶對善の爲めに、小善に對する執着を去るべきを敎ふ、是れ其取るべき點也。されど件の唯一絶對善の何物なるかは彼等未だ明白にせず、彼等は無執着、融會無碍、もしくは意識の集中其者を唯一絶對善と見做さんとする傾きあり。意識の集中は要するに一種の方法也、目的にはあらず、其の方法の極めて重要なる方法たるよりして、彼等は徑ちに此方法其者を目的と見做せるなり。されど目的はつひに他に存せざるべからず、何ぞや、曰く神是れ也。

（三十五年二月廿八日）

雜記其二畢



雜記其二畢



雜記　其三

○

或人、教會に行きしをりの所感を語りていふ、美しく飾り立てたる大廣間に、衆と共に一齊に讃美歌を我れも歌へば、我がこゝろの態度おのづと觀美的となつて、何となく神〻しさの念もおこりぬ、因りて思ふに、宗教は丸藥のごとく、之れを人に服せしむるに、まづ美的のもの、味よきものにして服せしむるなりと。　われ之れを聽きておもふ、げに宗教は屢〻美的の衣につゝまれて人に傳へらる。　されど、こは宗教家が山師根性を持して、苦き丸藥に甘味もたして人に服

ましめん爲めなりとはいふべからず、否此點に於て宗教家はむしろ正直なりと我は思ふ。何となれば宗教的眞理其者が、本來非常に美的のものなるが故に、之れを人に傳へんとせば、勢ひまた之れを美的に傳へざるを得ざるが故なり。こゝに宗教的眞理を美的といふ意は、觀照の側よりいふにあらずして、其の意義の富贍なること、渾一なること、圓滿なること、躍如たることに於て、美的對象と大差なきこと、否、むしろ之れに駕するものあるの意なり。宗教的眞理は哲學的眞理とは異なり、いちじるく情調を帶びたる眞理なり、豐富なる生命を具したる眞理なり。されば吾人の之れに對するや、一面、全渇仰をこれにそゝぐ嚴肅なる歸依の態度たると共に、一面たゞずその大景に神游恍惚し、縹渺として我れかの美的態度となるの傾あるを免れず。まして之れを人に傳へんとする場合には、生命ある辭、活きたる言葉、具象的の言語を假らざるを得ざるなり、一言すれば美的言辭を假らざるを得ざるなり。されど、如何なる美的の言葉も竟に之れを適當に言ひ現し得ざるは宗教的眞理の特質なり。如何なる美辭華文も、宗教的眞理の前には無味なり、インシピッドなり。如何なる美しき言葉も、宗教的眞理の前には訥するなり、囁嚅するなり、カーライルの所謂その上つらを babbling するに過ぎざるなり。如何なる雄辯閎辭も、宗教的眞理を語るの舌としては流暢ならず、明快ならざるなり。禪が以心傳心をいひ、不立文字をいひ、密々附屬をいふもの、一には實に宗教的眞理の深奥豐富、言葉にも文辭にもつく

しがたき味のあればなり。

○

宗教的眞理既に此くの如く詩的なり。否詩よりも尙ほその意義富贍なり、深遠なり、幽玄なり、宏大なり、之れを言表さんとすれば口囁嚅し、語窘澁し、理言筌に落つ。されど獨善の君子ならざる限りは如何にかして之れを表白せざるを得ず。こゝに於てか彼等宗教家は、皆詩的言辭をもて之れを表白す、哲理の語多き釋迦の語に、なほ何ぞ詩語多き、禪林の語に何ぞ花香鳥韻の風流文字多き、耶蘇の語に何ぞ盡きざる詩趣饒き。すべての宗教家の語が詩的言辭となる、これ彼等が或人の刺れるが如く、元來無味なる眞理を美しき言葉につゝみて人にすゝむるわざくれならんや、宗教の眞理そのものが本來絕大の詩、否詩以上の豐富の意味あるものなれば也。彼等が詩的表白の辭を用ふるは、むしろ宗教的眞理を如實に言ひ表さんとする努力なり、されど其の表白は、なほそが豐富の意味の萬一をだに髣髴する能はざるに苦しむなり。

（三月十一日）

○

基督の語中には、明かに自識して用ひたる詩的表白と、如實に其の感得せる眞理を忠實に言ひ現さんとして用ひたる詩的表白との二あり。前者はその許多の譬喩談、寓意談（パレブル）なり、勿論あからさまに譬喩談の形を取らずして言ひ現されたる言辭の中にも、詩人的態度を取りて、即ち詩意識、美意識の態度を取りて詩語をなせるもあるべし。さ

（三月十五日）

れどまた第三に最もつよく實在に觸れて、嚴肅に、如實に、其の眞理を言ひ表して、而して其語燦として詩語を織りなせるものあり。四福音傳中此種の語多きは否むべからず、「神愛」神人父子の關係の語のごとき、即ちこの第三種に屬するものなり。

（同　日）

編者曰、本書一八四頁「巫も美意識なくして云々」の節參照。

○

禪は人心の執着を除くことを少くとも其の主なる一目的とす。されば之れが手段として取るところ、曰く矛盾觀、曰く倒逆觀、須らく甲と乙とを雜處せしめよ、かくして吾人は甲乙のいづれにも執せざるべければなり。須らく、黑と白と、長と短と、大と小と、貧と富と、苦と樂と、山と水と、花と柳と、人と獸と、男と婦と、其の他一切の二極端相を同時に意識に錯在せしめよ、然らば我等その中の何物にも着して心亂れ動くことなかるべし。萬事萬有を矛盾觀せよ、倒逆觀せよ、井底紅塵飛、青山白浪起と見よ、心は常識所執の量を脫して、長空碧落、廓然無物の態となり來るべし。心一切の妄念雜慮の汚染を脫し去りて、はじめて空了の相に到るべく、かゝる融會無碍の一境に到りて、さて後、不壞金剛の當體、曠劫無始の眞人に撞着すべし、これ如是我聞の禪也。

（三月十二日）

○

「心の淸きものは福なり、その人は神を見ることを得べければなり」との耶蘇の語、何ぞ禪意と似たるの甚しき。禪は世俗の思ふごとく、單に心の空了をもて極致とするものにあ

らず、こは畢竟準備門なり。もしこれにて止まらば、そは消極禪にして、これ白隱禪師の曾て呵せしところなり。心の空了は、或活如たる生命にふれ、眞人に撞着せん爲めの道掃ひなり。この積極禪の一境、所謂山河大地を照破する底の或物を得る一境に到りて、はじめて悟や全しといふべきなりと、如是我聞、何ぞ耶蘇敎の所說と似たるの甚だしき。心を淸くするは神を見んための準備なり、神の生命に觸れんための手段なり。

（同　日）

○

されど、空了」と「淸心」とは、語似て意たがへり。空了は一切の思念を掃ひ去るとなり、一念の幾微をだにとゞめざるの義なり、この意甚だ新プラトーン派のプロティノスと相似たり。つまり意識を空白了して、この中に實在の眞の姿をうつし出さんとするが禪の本意なるに似たり。果して此くの如き方法を取らざれば實在と觸るゝ能はざるかは問題なり、少くとも耶蘇のごときは、これとやゝ似て而も甚だ異なる方法を取れり。彼れはたゞ心を淸くせよといふこの語は思念空了の義にあらず、道德的意義なり。心を單純にせよ、謙讓にせよ、自ら思ひあがるなかれ、卒直なれ、從順なれ、眞摯なれ、溫良なれといふやうなる意義と解すべきに似たり。かゝる美しき、すなほなる心もて神に對すれば、神のまことのすがたは朗然として仰ぐを得べしといふもの、即ち耶蘇の眞意の如し。且又其の見得る實在なるものも、禪の實在と耶蘇の神とは甚しく異なるが如し、耶蘇のは勿論